
魔法使いヒース

坂上明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いヒース

【Nコード】

N9371U

【作者名】

坂上明

【あらすじ】

かつて、アーカーシャと呼ばれる神によって救われたとされる世界。

アルケー王国に住む超貧乏貴族の少年、ヒース・ハスナーは、十二歳の夏の終わりに、幼馴染みのオリ、アリスと共に魔法学校カルネティアに旅立つ。将来王女と結婚して王になれという母の無茶な要求をいったん脇にやり、気楽な学校生活を送ろうと考えていたヒースであるが、時を同じくして、アルケー王国の王女であるはずのリア・アルケーが、カルネティアへの入学を決意する。

勝手気ままで傍若無人な魔法使いヒースと、真面目で誇り高い姫
リーアの、波乱に満ちた学校生活が始まる。

プロローグ「無垢な頃の回想？」

「ヒース。いっぱい勉強して最高の魔導師になりなさい。そして、大貴族の令嬢と結婚できるような男になるのです」

神暦六〇三〇年の、雪の季節だった。

代々貧乏貴族として名をとどろかせているハスナー家、その長男として六歳の誕生日を迎えた祝いの席で、母は僕にそう言った。どうも超貧乏貴族からの脱却を虎視眈々と狙う母にとって、生まれつき大きな魔力資質に恵まれていた僕は金の卵を産む鶏に見えていたらしい。

「そして、王様の目にかなう、立派な娘を作りなさい」

訂正。母の目に映っているのは、金の卵を産む鶏のお父さんだ。まあ、まだまだ根が純真で純朴でドロドロだった僕にとっては、どっちみち気が進まない話ではあったが。

それから時が経って、十二歳の今日。慣れ親しんだ土地を離れ、はるか海の向こうにある魔法学校『カルネティア』へ向けて旅立つ日の朝。

「ヒース、死ぬほどたくさん勉強して、王になりなさい」

「何か僕のハードル、めちゃくちゃ高くなってませんか母上」

ボサボサで長い髪を首の後ろでまとめ、左目に片眼鏡をかけてもうすぐ出発しようかというときだった。思い出の詰まった幽霊屋敷同然の我が家を眺めて物思いに耽っていた僕は、思わず突っ込む。

母は人差し指を目の前に立てる。

「いいことヒース。現在このアルケー王国は、非常に不安定な状態なの。第一、第二王子様が次々とお亡くなりになられた今、残るは許嫁のいない第一王女様とまだ幼い第三王子様のみ。これはチャンスよ。今のうちにカルネティアで優秀な成績を納めておけば、お姫様の婿候補になる可能性だって十分にあるわ」

「仮に失敗しても、候補に挙がるくらい優秀になっていれば、他の

有力な貰い手にも事欠かないというわけですか」

「あらまあ、別にそんなこと考えてないわ」

内面を覆い隠してしまうほど爽やかな笑顔に、僕は内心でため息をつく。

と、そのとき、背中に軽い衝撃があつた。

「お兄ちゃん行っちゃヤダ！」

今年で十一歳になる妹のユリが、腰に腕を巻き付けて嫌々をする。僕はそれを剥がすと、愛しの妹と目線の高さを合わせる。

「ごめんよ。ユリを置いて行っちゃうのはお兄ちゃんも悲しいけど、大丈夫。冬休みと夏休みにはちゃんと帰って——」

「他の女と仲良くするなんて許さないんだからあ！」

「……」

ふと、本当にこの家を一年も空けて良いのか、割と真剣に考えた。近隣の村落や知り合いの貴族達にかかる迷惑及び被害を算出し、まあ村一つ分で済むだろうと結論付ける。

「それでは行つてきます」

「いつてらっしゃい。休みには領地をおみやげに帰ってくるのよ」

母の激励を背に、僕は使い魔の猫（名前はメロン）を肩に乗せて魔法学校へ向けて旅立った。

ブローグ「無垢な頃の回想？」（後書き）

読みやすいように分割しました。

1・1「友と合流」

鬱蒼と生い茂る木々を歩き続けること一時間。無事に山を下りた僕の前に、閑散とした草原が広がる。

「……港はあつちか」

ペットのメロンを肩に寄せ、重たい鞆を引きながら、熱い日照りの下を歩く。

上を見上げると、空は忌々しいほど晴れやかだった。太陽の光が容赦なく降りかかり、雲は存在さえ許されていないかのように視界の端っこに追いやられている。

いつそ豪雨でも降ってくればまだ涼しいのにと思いながら、不意にこれからの生活に思いを馳せる。

アルケー王国立カルネティア魔法学校。それが、これから五年間お世話になる学舎の名前である。

この世の森羅万象を統べる力、魔法。杖とともに呪文を唱えれば、火を生み、水を操り、土を練り上げ、ありとあらゆる奇蹟をもたらす万能の力。

アルケー王国は、山と海に囲まれた自然豊かな国である。未開の地が多くあり、人の手はあまり入っていないが、街はそれなりに大きな発展を遂げている。気候は一年を周期に四つの季節が巡り、そのため元気な作物が育つ。空気も美しく、物見遊山に訪れる外国の有力者も多い。しかし近隣のテロス帝国とは仲が悪く、今も冷戦状態が続いている状態で、国政はあまり芳しくない。

そういう情勢が長らく続いているためか、魔法教育については、フレリアル教の総本山に匹敵する水準を保っている。魔法資質は主に貴族の血筋から発現し、開花した子供は十二歳になると、海の向こうにある魔法学校への入学が義務付けられている。

このアルケー王国をはじめ、どの国にも言えることだが、魔法使いの数というのはそれほど多くない。だからこそ、希少価値の高い

その力は非常に重宝される。

あらゆる困難を杖の一振りで解決し、世界の深奥へと足を踏み入れる存在——それが、世間一般に認知されている魔法使いたちの姿である。

故に、その最先端に行くカルネティアで優秀な成績を納めるといふことは、将来この国の重要な位置に着けるといふことでもある——のだが。

現実はそのあまくなかったりする。

数の少ない魔法使いを育てるといふ特性上、カルネティアにおいては、入学費用を含めたほとんどのお金は国が負担してくれる。しかし例外的に、授業で使う教科書だけは個人負担となる。

理由は単純、とても高いから。平民たちの間で普及しているペラペラの安い本とは違い、魔法の教科書というのは非常に高価なのだ。さすが魔法教育最先端を行くだけあって、その内容は本というより魔導書に近い。表紙もただの紙じゃなくてドラゴンの革張りだし、記載された術式は魔力さえ流し込めば、そのまま魔法として発動することができる（普通は杖が必要になる）。そんな代物だから当然、一冊の値段も半端ではない。爵位持ちの大貴族とかならともかく、僕らのような貧乏貴族は、親のお古を譲り受けるしかない。

もつともその気になれば、本そのものは全部奨学金でまかなうことが出来る。しかしそれは、国に借金を作るということでもあるので、あまり使いたくない。何せ無事卒業して要職に就けたとしても、実入りのほとんどは国に持っていかれるのだから。だからいくら貧乏とはいえ、貴族の中で奨学金に頼る者はほとんどいない。数少ない例外である父上は、今現在首都で奴隷——もとい、牛車のような毎日を強いられている。臓器でも闇に流せば返済どころかお釣りが来るのだろうが、未だ本人にその意志はないようだ。

「おい！ ヒース！」

後ろから名前を呼ばれ、僕は反射的に振り返る。ちょうどアステイン領へと続く道から、小麦色の髪をした活発そうな少年が走って

くるのが見えた。

オリオン・クロム・アスティンだった。このすぐ近くにある辺境の村の領主、アスティン家の長男で、僕より比較的裕福な貧乏貴族である。

「……」

メロンが「にゃあ？」と喉を鳴らす。

無言で視線を戻し、再び歩を進める。

「……っておい！ 何だ、さっきのめちゃくちや嫌そうな顔！？ 愛想笑いでも良いから取り繕えよ！」

後ろが騒がしい。僕は仕方なく足を止め、はるか向こうから悪友が追いつくのを待った。

「よ！ ヒース！」

「……… おはよう、オリ」

「何だか今すつげえ葛藤があつたよな！？」

「気のせいだよ。嫌だなあオリ。そんな言い方じゃ、まるで僕がオリのこと好いてないみたいじゃないか。僕はいつも君のこと大切な友人だと思ってるのに」

「そんな暗い調子で言っても説得力ないからな！？ 大体そうでなくたって、お前の言葉って怪しすぎんだし。その友人って位置も、いったいどれくらいの順位なのか……」

「ん？ ピーマンの次くらいだけど」

「この世から消し去りたい物ナンバーワンの一つ下ってことじゃねえか！」

「ちなみに好きなもの一位はメロン、次がアリス」

「誰も上位ランキングなんか聞いてねえ！ ていうかアリス、猫に負けてるし！」

「……ところでオリ、こんな朝早くにどうしたの？」

「ぜったい今気ままずくなつて話題変えたよなあ！？ お前と同じだよ、魔法学校へ行く途中！」

「……… はあ」

「わざとらしくため息つくな！ それほど目障りかオレ！？」

オリが何か喚いていたが、時間がもつたいたのでさっさと切り上げる。何せ学校行きの港まで山一つ超えなければならぬのだ。時は金なり、オリは借金なり。

「お、おい待てよ！ 一緒に行こうぜ！」

「残念だけど僕こっちの道だから」

「オレだってそうだよ！」

「え？ オリはあっちなんじゃないの？」

「ちげえよ！ 大体あっちって敵国との国境じゃねえか！ 死んじまうって！」

「確か昨日、夢の中で『オレはこの命を国のために捧げる。じゃあな。強く生きろよ、ヒース！』って言ってたっけ？」

「何気に格好いい夢の中のオレ！？ でも行かねえから！」

実に情けない返答だった。夢じゃあんなにも勇猛果敢だったのに、現実残酷だ。ついでに今の自分の状況もわりと残酷だ。

「はあ……何でヤロウなんかと一緒に肩を並べなきゃなんないんだろ」

「そういうのはせめて心の中だけで呟いてくれねえかなあ！ てー！ かお前、いつもよりテンション低くねえか？ せつかく念願の魔法学校に入学できたのにさ」

「……」

「……」

「そんなことないよ。オリと久しぶりの二人旅、楽しいなあっ！」

「不自然すぎるわ！ 何だその超絶爽やか美少年！？」

「舞踏会とかじゃけっこう高評だったけど」

「みんな初対面でお前の本性知らなかったからじゃねえのか」

「……オリも大人しく騙されていれば良いのに」

「ちゃんと聞こえているからな！？ どれだけ真っ黒なら気が済むんだよ！」

「失礼な」

僕は思わず憤慨する。真っ白や灰色ならまだしも真っ黒など……僕が真っ黒なら、母はいつたい何色なのだ？　ダークサイド？

「……で？　本当にどうしたんだよ」

「別に。熱烈な別れのせいで単に気分が乗らないだけ」

「お前いつも気分乗ってないだろ」

「そうだっけ。ところでオリ、馬車じゃないんだ？」

御者ごと蹴り落として乗っ取ってやろうと思っていたのに。

「おう。金が勿体ないから歩きで、でなきゃ箒で飛んで行けってさ。嫌になるよな。こっちには散々期待してるくせに、細かいところはケチるんだから。しかも将来は王宮付きの学者になれだなんて無茶な要求突き付けてきたんだぜ？　自分でも何になりたいのか漠然としてるっていうのに……　そういうやお前の方は？」

「『この国を支配しろ』だって」

「……決めた。オレ、勇者になる」

突然変な決意をしだした悪友に、僕は首を傾げる。オリの口調はまるで、近いうちに魔王が生まれるんじゃないかと言ってるみたいだった。

オリの実家であるアステイン家は、僕のアスナー家と同じ貧乏貴族に分類される。さすがに借金まみれのハスナー家ほど貧困に窮しているわけではないものの、親からの期待は、やはり大きい。初めてオリが魔法の資質を開花させたときの両親の喜び様を見れば、嫌でも分かる。

「そっいえば、オリって教科書全部買ったの？」

「はあ？　買えるわけねえだろあんなもん。鍋とか杖は新品だけどさ、後は全部親父のお古さ」

「やっぱりそうか」

「オレより、お前の方こそ良く全部揃えられたよな。おばさんのお古か？」

「うん。正確には、母上の母上の、そのまた母上が使ってたやつだけだ」

昔は父の本もあつたらしいが、少しでも返済の足しにするために売ってしまったのだそうだ。

「……すまん、聞いたオレが悪かった」

何故か愁傷に頭を下げるオリ。別に気にする必要なんてないのにと思う。もし全部揃わなかったら、むしろ取ってありがたく使わせてもらうつもりだったのだから。

そんな他愛のない会話をしながら歩いていると、いつの間にか枝分かれした二本道に差し掛かった。

「おい、これってどっちだ？」

「さあ？ 僕もここまではあんまり来たことないから、一度確かめない……オリ、ちよつとメロンお願い」

「え、ちよ、ちよつと待て、タンマ！ お前オレがそいつになつかれてないこと良く知って……ぎゃあああつっ！！」

肩からメロンを下ろして、適当にオリの顔に押し付けると、ローブをまさぐつて地図とコンパスを取り出す。何だか爪を研ぐような音が聞こえるが、気のせいだろう。

「んー、と……森の広がってる方が西で、川の流れてる方が東だから……こつちか」

僕は地図とコンパスをしまうと、メロンをオリの顔から引きはがす。可愛らしい子猫は、肩の上で満足そうに喉を震わせる。

「まったく、母上も意地悪だよね。こういう小道具持たせなくても、自動案内魔法をかけた地図をくれれば良いのに。どうしてあんなに天の邪鬼なのかなあ……」

「血だろ……それも魂の。絶対お前にも流れてる」

「うん？ ああ、確かに血だらけだね」

文字通り、オリの顔は思わず目を覆いたくなるほど引つかき傷だらけだった。

「そついえば、アリスはどうしたのかな？」

朝の涼しさが薄れて気温が高くなってきた頃、僕はふと気になってオリに訊ねる。

アリス・リ・ペルネート。僕たちの幼馴染みの一人だ。と言っても、僕やオリのような貧乏貴族とは格が違う。貴族の中でも決して多くない爵位持ち、ペルネート公爵家の一人娘である。ハスナー家が所有する山と、その近隣に位置する小さな村を領地とするアステイン家。この二つの領地を丸ごと呑み込んだ、ちよつとした小国並みの土地を統治しているのだから、その力は推して然るべきだろう。「知るかよ。どうせ寝坊でもしてんじゃねえの？」

「——誰がお寝坊さん？」

突然空から声が降った。

控えめな、けど妙に澄んだ声。と同時に、二人の周囲を突風が駆け抜ける。

「うわっ！ な、なんだあつ！？」

風に煽られ地面に転げたオリが、口に入った土をはき出しながら素っ頓狂な声を上げる。僕は目元を庇いながら視線を空へやる。雲一つない晴れやかな蒼い景色。よく見るとそこに、小さな影がある。いや違う、あれは——

「竜種……？」

「何だつて！？」

次の瞬間、それは凄まじい速度で急降下してくると、その大きな翼を広げて十メートル手前のところに着地する。ズシンと地面が揺れる音が響き、近くに見える森から野鳥が驚いて飛び立つ。強力な風魔法並みの突風が駆け抜け、僕は思わず顔をしかめた。

「おはよう、ヒース」

ようやく土煙が晴れ、薄目を開けた僕の前には、巨大な黒竜の身体に隠れた女の子の姿だった。太陽の光を反射する鮮やかな銀髪と、気弱そうな顔に隠れた紅い瞳の少女は、優雅な動作で地面に降り立つ。

「久しぶりアリス。三人で将来のことを語り合った夜以来だっけ？」

「人はそれを三日前って呼ぶ」

とりあえずローブに付いた埃を払って挨拶を返すと、アリスは抑揚のない声で相槌を打つ。そして彼女は僕の肩に乗ったメロンの頭をつつとりとした表情で撫でる。こういうところがオリとは大違いだ。

「おい！ オレへの挨拶はどうしたんだよ！？」

と、完全に無視された形のオリが大声を張り上げる。

「………………。ヒースは歩いて行くの？ 良かったら乗ってかない？」

「無視！？ ヒースより酷くないかお前！ ていうかこれ親父さんの使い魔だろ！ なんてお前が乗ってんだよ！？」

「……女の子の一人旅は危ないからって、貸してくれたの。この子なら、日が落ちる前に港に着けるから」

「相変わらず娘に弱いなお前の親！」

確かに。馬車すらケチられるオリと比べたら雲泥の差であった。

ちなみに僕の母ならば、例え王家並の財産があっても徒歩で行けと命じただろう。崖があれば息子を突き落とせ。なければ崖まで行って突き落とせが我が家のモットーである。

まあそれはともかく。

「乗せてってくれるの？」

「朝からずつと歩いてるんでしょう？ このままだと夜になっちゃうよ。それに、一人より二人の方が、わたしも……た、楽しいし……」

最後の方は声が小さくて聞き取れなかったが、申し出は素直に嬉しかった。何せ竜は馬車なんかとは比べものにならないほど速いのだから。

「うん。じゃあお願いしようかな」

そう言つと、アリスがパツと花の咲いたような笑顔になる。

「よっしゃ、助かったぜ。サンキューな！」

「……オリ、乗るんだったら五十ユドルだから」

「オレだけ金取るのかよ!？」

途端に不機嫌になったアリスに、オリは喚く。

「公爵家に仕える竜の背に乗るなら、当たり前。貧乏貴族風情が偉そうにしないで」

「年中オレより偉そうに振る舞っている貧乏貴族がお前のすぐ後ろにいるんだが!？」

オリの指摘に、アリスは知らんぷりする。

しかし五十ユドルとは、これまた高い。そこらの宿一拍分だ。今の手持ちで払えないこともないだろうが、その場合は彼の全財産が消え去ること間違いなしだ。仕方なく、僕は「まあまあ」とアリスをなだめる。

「アリス、せっかくだから意地悪せずに乗せてあげようよ」

「ひ、ヒースがそう言うなら、良いけど……」

そう言つと、アリスはすぐに元のしおらしい態度に戻り、そのまま竜の鞍にまたがった。

ヒースも彼女の後ろに乗ると、腕をお腹に回す。その後にオリが続いた。

「ふう……危うく一文無しになるところだったぜ。ありがとなヒース」

「いいって。いつか僕が国中を敵に回しても味方でいてくれると誓つてさえくれれば」

「要求でかいなおい!」

「嫌なら別に良いよ。利子付きの貸しにするから」

「……ぐ……っ、間違つても戦なんて起こそうと思わないでくれよ……」

「大丈夫。今のところそんな気ないから」

「ヒース」

密着した状態で、アリスが身体を捻る。

「世界中があなたの敵になつても、わたしだけは味方」

「うん? アリスはいいよ。女の子なんだし」

「……むづ……」

何故か彼女はふくれて、やや乱暴に鞍を蹴る。黒竜は少し驚いたように翼を広げ、三人を乗せて大きく空へ向けて羽ばたいた。

1・2「空の旅と悲劇」

大空の旅は、やはりただ歩くよりもずっと新鮮だった。何せ空気は美味しいし、風も涼しくて心地良い。目線の高さが変わっただけに、世界はそれだけで普段より何倍も美しい。青と緑と土色に彩られた綺麗な景色が移り変わり、辺境の村に暮らす人々がアリのように見えるさまは爽快の一言に尽きた。

「神の視点ってこういうのを言うんだろうね……」

「さらっとんでもないこと言うな！　って、そっぴやお前さ——」
「ん？」

「この国を支配する云々って、結局どういう意味だよ。まさかアリスを傀儡にして内乱を起こす気じゃ……」

「まさか。いくら僕の母上でもそんなことは夢にも思わないよ」
成功率低いから。

「だよな……じゃあ具体的には何を言われたんだよ？」

「この国の王になりなさいだって」

「は……？」

「要するに、お姫様と結婚するように、ってこと」

「——っ!？」

腕を回してるアリスの身体がビクリと揺れた気がした。

「？　どうかした、アリス？」

「な、何でもない……」

一瞬だけこちらを見たアリスは、すぐまたそっぽを向く。

「お、おおお姫様と付け、結婚だってっ!？」

オリが耳元で喚く。お願いだからやめてほしい。

「ひ、ヒース！　お前ホントにこの国を地獄に変えるつもりかよ!？」
「？」

「……何言ってるか分かんないけど、お姫様なんかと結婚する気なんてないよ」

「は……？」

今度は二人分の声が重なった。前と後ろから。オリと、そしてアリスの驚愕が伝わる。

「お前……とうとう気でも触れたか？」

「ヒース。わたしの家、お金以外に自慢できるものなんてないよ……？」

「うん。二人が僕のことどんな風に見てるのか、良く分かったよ」
にこやかな笑顔を見せると、二人とも慌てて目を逸らした。
僕は一つ咳払いをする。

「王家なんて退屈なだけだよ。毎日毎日政治に引つ張り回されて、自由な時間のない折檻のような人生を強いられるんだから。そんな目に遭うくらいなら、どこかの大貴族のお嬢様と結婚した方が、まだずっと気楽だよ」

「まるでその目で見てきたような台詞だな」

僕はオリの言葉を無視した。

「ヒース……わたし、大貴族のお嬢様」

「？ カルネティアじゃ、きっと大人気になれるね」

そう言つと、彼女は何故かまたふくれた顔になった。

太陽が傾き、徐々に空の色が澄み渡った青から絵の具を上塗りしたような朱へと染まる頃。ようやく学校行きの船が出る港近くまで来た三人は、少し離れた崖下に竜を着地させると、すっかり風でしわだらけになった服装を整える。

「何でここで降りるんだよ」

少し不満な様子で、オリが文句を言う。

「いつそ船になんか乗らないで、これで直接学校に乗り込めばいいじゃん。きつとみんな驚くぜ」

「敵国のスパイだって間違わられて撃ち落とされるならそれでもいいけど」

『分かりきったことを聞くな』。投げやりに答えるアリスの瞳がそう告げていた。

「わ、分かったから、そんなに睨むなよ……」

「オリは目立ちたがり屋だね。そんな態度じゃ上級生に絡まれるよ」
「お前にだけは言われたくない台詞だな」

オリは非常に残念そうな目を黒竜に向ける。巨大な竜はアリスの前で丁寧な頭を下げると、大きく翼を羽ばたかせ、元来た大空へ帰っていった。

それを見届けた後、三人は崖を迂回して森へ出る。途中、何度か方向が分からなくなり、正確な現在位置を確認するために、見晴らしの良い丘の上に出るはめになった。

「し、死ぬ……」

きつい斜面を登り切ったオリが、地面に倒れ込んで呻き声を漏らす。僕はそれを聞かなかつた振りをして、港があるはずの方向へ目をやる。

「ヒース、あそこじゃない？」

オリと違って汗一つかいてないアリスが、涼しげな表情で向こうの一点を指さす。

「——ああ、確かに港っぽいね……うん？　ねえアリス、あっちの大きな街みたいなの？」

「あれ、王都だよ……」

「え、あれが？」

昔一度だけ見た王都の夜景と記憶が食い違っていたため、僕は少し驚いた。確かに言われてみれば、街の中央に王宮らしき物が見えなくもない。

「意外と近いんだね。王都とカルネティアって」

「カルネティアは重要な場所だから。これだけ近いのは、向こうに何かあってもすぐ動けるようにするためなんだって、父様が言ってた」

「へえ……」

なるほどと、僕は顔を打つ突風を手で防ぎつつ、王都の街を見下ろす。

「王都だって！？　どこだよ、オレ見たことねえんだ！」

後ろから、やや興奮したオリが僕たちの方に駆け寄ってくる。どうやら疲れは取れたらしい。相変わらず立ち直りだけは早かった。

「うわ、さすがにでっかい街だな！　なあ、あそこに王様が住んでんのか？」

「王宮があるんだから、当たり前」

何故かアリスの声が若干冷たくなったような気がしたが、オリは気付かなかったようだ。

それにしても王族か……

「——ねえ、ふと思ったんだけど、お姫様もカルネティアに通うのかな？」

生徒の大半を貴族階級が占めているものの、基本カルネティアは、魔法使いのための学校だ。極端な話、魔力さえあれば誰にでも入学資格はある。ごく希な例ではあるが、平民出身の魔法使いもいるという話だ。

だから王族が通っていてもおかしくないと思ったのだが……アリスが首を横に振る。

「うつん、王族の人たちは行かない。専属の教育係が直接指導するんだって」

「ふーん……」

さすがは王族。僕たちとは根本的に立場が違っらしい。

「……ま、その方が都合良いけど」

「何か言った？」

「何でもないよ。さ、場所も分かったし、早く行こう」

「おいちよつと待てって！」

二人を引きずって、僕は丘を降りた。

「なんだ、これ……」

「すごいね……」

「壮観……」

夕方。日が落ち、辺りが徐々に灰色へと変わる頃に港に着いた僕達は、それぞれ感想を漏らす。

カルネティア港は人の山でこった返していた。

貴族の姿だけじゃない。港には非常に多くの露店が並んでおり、まるで都一つが丸ごと越してきたような賑わいを醸し出していた。

「なんでこんなに店があるんだよ……」

「多分だけど、金持ち目当ての商人たちじゃないかな。ほら、こんなにたくさん貴族が一度に押し寄せる機会なんて滅多にないから」その証拠に、店に飾ってあるのは半が高級文房具の類であるが、もう半分は宝石やらドレスやらといった、明らかに学業に関係のないものばかりである。

「ふーん、なるほど……って、洋紙一枚九ユドル!? いくらなんでも高すぎだろ!」

「金箔入りって書いてあるよ。本当かどうかは微妙だけど」

「ムチャクチャだな……」

呆れたというよりげんなりした様子で、オリがため息をつく。と、その脇を褐色肌の女性がすり抜ける。

(ん……?)

僕は心の中で首を傾げる。全体的に布の占める面積が多い、ここより東の地で流行っている不思議な装束を身にまとったその人物は、そのまま真っ直ぐこちらに来る。

「おっと、ごめん」

互いの肩がぶつかり、その人はちらりとこちらに目を向けて謝った。彼女はそのまま人混みの中に消える。

「ヒース、せっかくだし何か食い物買おうぜ。ここの連中がどんなにがめつくても、どっかの店は安くて美味しいはず——って、おいおいおいっ!？」

「どうかした？」

「ねえっ！？ オレの財布が！」

オリは慌てて身体中をまさぐり、果ては何度もジャンプするが、ユドルの詰まった袋どころか金貨の音すら聞こえない。

「まあスリに遭えば当然だよな」

「スリ！？ いつ！？」

「ついさっき。僕もやられた」

僕は後ろの人混みに視線を移す。褐色の女性の姿はもうどこにもない。

「さがすだけ無駄だろうね。人も多いし」

「気付いてたなら捕まえるよ！ お前だつてすられたんだろ！？」

「うん？ ああ、僕は平気。元々お金無いし。メロンの餌袋を勘違いして盗つていったけどな」

相当重いから、しばらくは気付かないだろう。肩の上でメロンが「にゃあ！？」と叫んだが、後で美味しいものを買ってあげるとなだめたら大人しくなった。しかしオリの方はまだ叫んでいた。

「それでもオレの全財産だぞ！？ このままでたまるか！」

「たった五六ユドルしかないのに？」

「たった言うな！……つて、何でお前が知ってるんだよ？」

「数えたから」

僕は懷から、こっそり取り返した袋を取り出す。

「本当、自分がやられるなんて夢にも思つてなかったみたいでやりやすかったよ。はいオリ。もう盗られないだよ」

「お、おう、サンキュー……何枚か抜いてないだろうな？」

「嫌だなあ、僕がそんな人間に見える？」

「見える」

「……まあ分かつてるけど。大丈夫、一枚も抜いてないよ。こつちも収獲あつたしね」

言つて、僕は右手を軽く挙げる。そこには、紐で吊された大小様々な袋がいくつもあつた。全部、さっきの女性から失敬した物だ。

少し揺らすと、中で小銭が重そうにジャラジャラ鳴った。

「……」

オリが、どこか怯えた表情でこちらを見る。そして何を思ったのか、自分の袋をズボンのポケットに突っ込んだ。

「？　じゃあ、お金も手に入ったし、どこかで食べる？　そうだ、

アリスは——って、あれ？」

ふと周りを見ると、アリスの姿がない。いつの間にかはぐれてしまったみたいだ。

と思つたら、ちょうど斜め向いの店にいた。

「ヒース！　惚れ薬がたったの九百ユドルだつて」

目をキラキラさせて、アリスは店に並んでいるポーションを指差す。

……多分ここにある店の大半は、入学で舞い上がっている一年生を力モにしているんだろうなあと、僕は漠然と思った。

惚れ薬に執着するアリスを二人がかりでどうにか引きはがした後、軽く夕食を済ませた僕たちは、露店から離れたところにある、海の景色が綺麗な広場に来た。広場の向こうにはちよつとした塔くらの高さを誇る階段があり、どうやら船はその先に到着するらしい。

周りにはちらほらと他の貴族の姿もあったが、せいぜい片手で数えられる程度の人数しかない。大半は、まだ露店の方で品物を物色しているはずだ。ここにいる連中は、暇つぶしか、単に飽きたかのどちらかである。ちなみに僕らはどっちでもない。

「良い景色だね」

何とはなしに呟く。だが二人からの返事はない。

「うえっぶ……」

「気持ち悪い……」

静かな広場に、二人の呻き声が重なる。

「まったく、二人とも元気出しなよ」

「む……無理だつてえの……ちよつとでも動いたら死ぬ……」

「お花畑とベッドがほしい……」

僕は呆れるように肩をすくめる。

「調子に乗って、デザートにウイスキーアイスなんて食べるから……」

……」

「だって、ふわふわした気分になれるって……」

「大人はね。はい水」

コップを差し出すと、アリスは申し訳なさそうに手にとってゆつくりと飲む。少しでも気分が良くなればと、僕は優しく背中をさする。

「ヒース……オレにも水……う——っ！」

「そこにたくさんあるから飲めば」

「海水じゃねえか！ 何でアリスとオレじゃそんなに扱いが違うんだよおま——っ！！？」

抗議しようと声を荒げた途端、気持ち悪さが頂点に達したらしく、オリは口元を押さえてうずくまる。

どのくらいそうしていただろうか。やがてぜえぜえと荒い息づかいとともに、やや青い顔を上げたオリは、恨めしげな視線を向ける。

「……っ、だいたいお前だって一緒に食ったはずだろ……」

「これくらいでどうにかなるような身体なら生きてないよ」

母の、毒薬調合と見紛う料理の数々に比べたら、お酒程度、苦でも何でもない。

とはいえ、やはりこの二人にはきついだろう。ある意味自業自得ではあるものの、この後のことを考えると、少し気の毒なようにも思う。

僕はローブの奥から解毒作用のある薬瓶を取り出し、丸薬を三粒ほどてのひらに落とす。

「ほらアリス、これ飲んで。気分が良くなるはずだから」

アリスは、ちよつとだけ躊躇する目で真っ黒な丸薬を見つめたが、気持ち悪さに我慢できなくなったのだらう。おずおずとそれを受け

取ると、口に含むなり、水で一氣に胃へ流し込んだ。

「——っ！　くくく……っ！！」

あまりの苦味に耐えられないといった表情で、アリスが声にならない悲鳴を上げる。

「しばらく横になったら？」

「……っ、そうする……」

アリスは一瞬顔を赤くして、僕の太ももの上に頭を預けた。貴族の女の子としてははしたない気がしないでもないが、まあ今は仕方ない。

「ヒース……オレにもそれくれ……」

「一粒十ユドルだよ」

「だから何でオレだけ金とんだよ、お前ら！？」

叫んだ途端、また吐き気がぶり返してきたらしく、オリは口を押える。そうして時間は過ぎていった。

1・3「アルケーの姫」

しばらくして深夜になると、広場にも人が増えてきた。すっかり体調の回復したアリスが、隣で少し眠そうに目をこする。僕もこんな遅くまで起きていることは滅多にないので、頭を振って睡魔を誤魔化さなければならなかった。ちなみに結局丸薬を飲まなかったオリは、座ったまま気持ち悪そうな顔ですっかり眠りこけていた。時折呻き声が漏れているところから、どうも夢見は良くなさそうだ。

「船、来ないね……」

「きつともうすぐだよ……」

「海、暗いね……」

「オリの未来みたいだね……」

そんな気の抜けた会話のやり取りで時間を潰すこと半刻。さすがに飽きてきて、僕は大きな欠伸を噛み殺す。

「眠い……」

こんなに遅くまで起きているなんて、いつ以来だろう。試しにくつかの出来事を遡っていくと、かなり昔の思い出に辿り着く。

あれは、確か五歳くらいの頃だったような気がする。

そうだ、家から遠く離れた森の中で迷子になって、同じく迷子になった女の子と出会ったせいで、大変な目に遭った。

思わずため息が漏れる。その時、今まで大人しくしていたメロンが、唐突に肩から降りた。

「どうしたの？」

僕は驚いてメロンを見る。この美しい毛並みの猫は、滅多なことでは自分から離れたがらないからだ。メロンは石造りの地面を真っ直ぐ歩いていき、やがて六メートルほど先にいたローブ姿の人影のところまで足を止めた。

「……誰？」

その人物は、頭をすっぽりと覆うフードを被っていた。僕は思わ

ず首を傾げる。

このように貴族が集まる場では、普通あのように顔を隠す格好は好まれない。ここの貴族にとって容姿とは、一種のステータスであるからだ。爵位や装飾品と同じ。人前に晒さなければ訝られる。あれでは外見はおろか、生別すら判然としないだろう。ちやうど僕らと同じくらいの背丈だから、多分新入生（それもローブの意匠から、相当高貴な家の）だと思うが、正直とても怪しい。実際、通りがかった貴族の何人かは、一瞬奇異の目をフードの奥に向けていた。

その人影は、しばらく興味深そうにメロンを見つめた後しゃがみ込み、その身体を優しく撫でる。メロンが満足そうに「にゃあ」と鳴く。フードの隙間からわずかに覗く口の形が、ちよつとだけ緩くなつた気がした。

「知ってる人？」

いつの間にか同じように目で追っていたアリスが訊ねてくる。気のせいか、その声は硬い。

「まさか」

僕は首を横に振る。生憎、あんな高そうなローブを身に付ける知り合いなど心当たりはない。いればむしろとっている。

「こつちに来るみたい」

彼女の言つとおり、フードを被った人物はメロンを抱っこして立ち上がると、真っ直ぐこちらへ向かってきた。そして、僕らの前で立ち止まる。

「——これは君のか？」

凜とした声がフードの奥から聞こえた。美しく透き通つた、女の子の声。あまりに予想外で、僕は咄嗟に言葉が見つからず、頭を縦に振るだけで答え、メロンを受け取ろうと手を伸ばす。

（あ……）

メロンを差し出す拍子に、少女のフードから青い髪が一房落ちた。「おっと」

女の子は、ちよつと身だしなみを整えるような動作でそれを隠す

と、「ではまたな」と言い残して人混みの中へ去っていった。

「……………またな？」

「これからよろしくって意味じゃないかな」

アリスの視線が突き刺さる。正直に言っただけなのに、何故か居心地が悪くなる。

だが直後、海の近くにいた人垣の中から大きな歓声が沸き上がった。

「なに…………？」

驚いたアリスがそちらへ視線を向けてくれたおかげで、僕は内心ほっとする。

貴族の子供たちが、夢中で背中を向けて海の方こうに見入っていた。とうとう船が来たのだろうか。にしては、何だかはしやぎすぎのように思える。

海の方こうに目を凝らしてみる。果てのない闇の中に、ぽつんと灯りが浮かんでいた。

一瞬、鳥だと思った。人を乗せられるほど巨大な幻獣の鳥か、さもなければ竜種だ。

だけど良く見ると違った。

鳥でも、ましてや竜種でもない——船だ。

とてつもなく巨大な船が、海の上に浮いていた。

やや平べったい印象を受ける、見慣れない形の船だった。漁師が使っている木製のとはまるで違う。何枚もの金属版を重ねて造ったクジラのような船体だ。両脇から巨大な翼が突き出ており、遠目には鳥そのものに見える。

「アリス、あれってなにか分かる？」

「…………多分だけど、ヴァルキュリアだと思う」

「ヴァルキュリア？」

「ヴァルキュリア級大型船。街一つ分の人間を丸ごと運べる、古代文明の遺産…………本で読んだことあるけど、初めて見た…………」

彼女の声は、わずかに震えていた。

「まさかあれで魔法学校へ行くんじゃ……」

「そうだよ」

突然後ろから返事があり、僕は驚いて振り返る。

「や。驚かせたかい？」

いつからそこにいたのか。そこには僕より頭二つほど背の高い、ブロンドの男が立っていた。歳は三つ四つ上だろうか。目は緑で、顔立ちはハンサムの部類からは若干ずれているが、頼りがいのありそうな精悍さが滲み出ている。ローブは燃えるような赤色で、胸元では十字架のバッジが、ランタンの光を反射して輝いていた。

「初めまして。今年、第四学年代表を任せられることになった、アルフレッド・ウエストミンスだ。君たち新生生だよね。急いだ方がよい。もうすぐこちら辺は人の山でいっぱいになるはずだから」

それだけ言うと、アルフレッドと名乗った上級生は急ぎ足で去っていった。どうやら他の新生生にも同じようなことを言っただけでいるようだ。

「どうする？ まだ船着いてないけど」

「行きたい。船、もっと近くで見たいし」

「じゃあ決まりだ」

僕は立ち上がると、酔い潰れたオリを二人で支えて海辺へ向かう。頭が上下に揺れるたびに横から凄まじい呻き声が響いてくるので、なるべく揺れるように歩くのに苦労した。

さっきの上級生の言うとおりだった。数分も経つと辺りは徐々に人の姿が増えていき、石造りの階段を何とか登り切って——オリと、彼の分の鞆まで引きずっているので疲れる——乗船場らしき大きな平地に着いた頃には、後ろはアリのようになくさんの貴族で埋まっていた。

ヴァルキュリア船はもう港に停泊していた。

間近で見るとやはり大きい。全体としてのスケールもそうであるが、一つ一つの型の大きさが半端ではない。それにあの翼、今は大きな鉄塔に固定されているけれど、この船は別に翼を羽ばたかせて

いたわけではない。アリスの方もただただ圧倒されているらしく、いつもは半開きの目をまん丸くさせている。ふと周りを見ると反応は似たようなもので、上級生はじつくりと芸術でも鑑賞しているみたいだったが、自分たちと同じくらいの貴族の子弟たちは、口々に叫んだりはいやいだり、とにかくうるさく自分たちの常識を越えた物体に見入っていた。

「静かに！」

突然、頭上から待機を震わせる大音響が響いた。魔法で音量を上げているとしか思えない大声に、新入生は一斉に身を竦め、うち混乱した何人かが、次々に足をもつれさせたり転んだりした。もつとも、その声で一番の被害を被ったのは、間に挟まれているオリであったが。

一方多くの上級生も身を強張らせていたものの、その顔は別に驚いてはいなかった。良く見ると中には耳栓を外す生徒もいる。どうやらこの大声は、毎年恒例の行事のようだ。

ヴァルキュリア号の甲板に、とても背の高い壮年の女性が立っているのが見えた。どうやら先ほどの声は、あの人が発したものだらしい。

女性は軽く咳をすると、船の上から飛び降りた。何人かが息を呑む音が聞こえたが、女性はそのまま海に落下することなく、宙に静止した。

「こんばんは」

女性の目が、この場に集う全員を見回す。

「新入生の皆さん、初めまして。私はカルネティア魔法学校で教師を務めている、リジー・ステルス副校長です。さあ、新入生は前へ。それ以外の生徒は少し後ろへ下がってください。保護者同伴でも構いません。急いで！」

上級生の大半が、言われるまでもないといった様子で後ろへ下がる。逆に新入生の多くは困惑の表情を浮かべ、おずおずと人波をかき分けながら最前列へと出る。どの顔も、これからいたい何が起

こるのかと不安げだった。アリスでさえ、この数分間に味わった驚愕で精神が麻痺してるらしく、いつもの無表情に若干の怯えが浮かんでいる。

「ひゃ——っ!？」

突然後ろの人混みから、みずばらしいローブに身を包んだ少女が飛び出してきた。どうやら勢い余って突き抜けてしまったらしい。咄嗟にバランスを取ることも出来ずに、少女は派手に転げて地面に顔をぶつけた。周囲から奇異の眼差しが注がれる。安物の服に安物の荷物入れ。ローブはブランド物ではなく、飾り気のない無名の量産品。貴族にしては質素すぎる。超が付くほどの貧乏貴族である僕でさえ、ローブはカステイのブランド物だ。

女の子はしばらく痛みに肩を震わせていたが、やがてよろよろと力なく起き上がると、恥ずかしそうに乱れた衣服を整える。頭に被ったローブが戻され、隠れていた顔が露わになる。肩越しに見ていた僕はわずかに目を見開いた。

その子の髪は黒かった。赤毛でもブロンドでもない、カラスの羽みたいに艶のある長い黒髪だ。この国では珍しい、遙か東にある聖教国の人の特徴である。だが、普通の聖教国人が黒目黒髪なのに対して、彼女の瞳は鮮やかな翡翠だった。鼻の先が、ほんの少し擦りむけて赤く腫れていた。

「大丈夫？」

僕はオリを支えるのをやめて女の子にハンカチを差し出す。さすがにオリを一人で支えるのは難しかったのか、アリスが彼を地面へ転がすのがちらりと見えた。

「えうつ!？」 あ、あああ、はいっ! あ、ありがとうございます
大丈夫です!」

氣遣われたのがよほど意外だったのか、女の子はあたふたと慌ててハンカチを受け取りながら頭を下げると、再び人混みの中へ消えていってしまう。どうやら、ここが最前列だと気付いていないようだった。

それを見送りながら、やはり貴族らしくないなと僕は思った。普通の貴族なら、例えば身分が同じだとしても、自分のような超貧乏貴族に頭を下げたりしないはずだけど――

「ヒース、後ろ……」

アリスが焦ったような声をかけてきた。なんだろうと思って船の方へ向き直ると、そこにリジー先生が立っていた。

「ええと、何でしょう……?」

「……少し聞きたいことがありますてね。その彼はいつたいたのかしら? 見たところ、さっきからずっと元気がないようですが」

リジー先生は視線を僕から倒れているオリの方へ移し、またこちらを見る。

僕は内心ほつとする。どうやら変に目をつけられたわけではないらしい。

「ああ、彼は………実はここへ向かう途中の森で、腹が減ったとそこら辺に生えてたキノコをつまみ食いしたら具合が悪くなったみたいで、ずっとこの調子なんです」

まさかアルコールを口に含んだとは言えないので、適当に誤魔化す。咎められるのはオリだが、こちらに飛び火してこないとも限らない。先生は口の端を引きつらせ、どこか呆れた顔で腰から杖を抜くと、それをオリへ向ける。

「リカバリー」

リジー先生が呪文を唱える。すると、さっきまで身じろぎ一つしなかったオリの身体がぴくりと動いた。

「ん……? あれ……頭痛が……」

不思議そうに頭を振り、オリがよろよろとした動作で立ち上がる。「オリ、ちゃんとして。先生の前だよ」

「せんせい………ってもうそんな時間なのか!? やべっ、第一印象からオレの評価が――」

「心配せずとも、貴方への評価はもうどん底ですよ」

「ええっ!？」

リジー先生の言葉に、オリは絶句する。

そんな彼を無視して、リジー先生は再び宙に浮かぶと、最前列に集まった新人生の面々を見回す。

「……さて。ではさっそく、新人生諸君は船に乗ってもらいますが……その前に、貴方がたには一つ、今後の事に関わる試験を受けてもらいます」

途端、今までの騒ぎが嘘だったかのように周囲に静寂が満ち——次の瞬間、新人生たちの間に喧騒が巻き起こった。ただし、例によって上級生が落ち着いている（というより楽しんでる？）ところを見ると、これも毎年恒例の行事のようだ。

「落ちたらどうなるの……？」

「まあ、普通なら入学取り消しだろうね」

アリスは泣きそうな顔になった。

「普通ならって話だよ。カルネティアは魔法学校——それも大半が貴族だから、こんな方法で入学取り消しなんてしない。せいぜいペナルティがあるくらいだと思うよ」

それでも、アリスの顔色は晴れなかった。そうこうしている内に、リジー先生が試験の詳細を説明する。

「試験の内容は至極単純です。皆さんにはこれから、船のところまで歩いて行ってもらいます。具体的には——」

リジー先生が杖を振る。すると船と生徒らを隔てていた空間から大きな黒煙が立ち上り、あつという間に船の姿を覆い隠した。

「——この黒煙の中を進んでもらいます。この煙には特殊な魔法がかけてられており、皆さんの魔法資質に応じて足場を形成します。最初の方は何ともありませんが、進めば進むほど疲労が身体を蝕み、限界を超えると足場が消え、海に向かって落ちる羽目になります。落ちた方々は進んだ距離に応じてDからAまでクラス分けされるわけですが、最下位のDクラスになった生徒は、これからの学校生活で大きな制限がかけられることになります。逆にC、Bとランクが

上がれば、学校内での権利も上がるので、真剣に取り組むように。もしも見事渡りきったなら、特別待遇のAクラスが保証されます。なお試験に臨むに際して、必要のない荷物はその場に置いておいて構いません。終了と同時に、それらは自動的に船へ詰め込まれます。それでは新入生諸君、頑張ってください」

後ろから声援や野次が飛ぶ。見回してみると、周りの生徒達の顔はどれも面白いくらいに蒼白であった。

「やれやれ、みんな根性ないね」

「おい、そう言いながらなんでオレの背後に回ってるんだ？」

「気のせい気のせい。まったく自意識過剰だなあオリは」

内心で小さく舌打ちしつつ、僕はオリに向かって振り上げていた足を引っ込める。せっかく実験体になろうと思ったのに、勘の良い奴である。

だがまだ手はある。この試験、まずは挑戦する人物をじっくり観察してから挑むのが最も望ましい。オリには申し訳ないが、ここは尊い犠牲としての運命を受け入れてもらおう。

僕は懷からそつと錯乱蜂の針を取り出すと、オリの首筋へ向かって狙いを定める。

が、そのとき、右端の人混みの中で誰かが動く気配があった。

僕は針を戻してそちらを見る。少し丸っこい体型の少年がよろけながら前に出て呆然となっていた。

見たところ、どうやら自発的に動いたわけではないらしい。彼の父親と思わしき男が人混みから一歩前へ進む。

父親らしき人物が、微かに顎を上げて少年を促す。彼は弾かれたように、黒い煙の中に全速力で突っ込んでいく。

お世辞にも速いとは言い難い鈍足の先が煙に触れた。瞬間、少年の姿が唐突に消えた。と思つたら、まるで不味い物を口から吐き出すように、まん丸とした少年が煙から弾き出されて少し離れたところに落ちた。

「言い忘れていましたか——」

リジー先生が眉をつり上げながら、付け加えるように言う。

「これには魔力探知機能も施されています。もし魔法使いでない者がここを通ろうとすれば、さきほどのように弾かれるので注意するように。残念ながら毎年必ず何人かは、魔法具を使えば魔法使いかどうかなど簡単に誤魔化せると考えている者がいるようですが、小手先の手段は通じないと、皆さん良く理解してください」

呆れの混じった目で、リジー先生が眼下を見下ろす。しばらく、気まずい沈黙が少年と父親の周囲に流れた。それに耐えかねたのか、父親は一つ咳払いをすると、少年の腕を掴んで逃げるように広場から去っていった。つられて家族連れが十組ほど、出来るだけ目立たぬよう腰を低くして逃げていく。

「そついうことが……」

その後ろ姿を見届た僕は少しか肩の力を抜く。予期せぬ脱落者のおかげで、先生の説明に嘘がないことが分かっただけでも十分な収穫である。おかげで友人を犠牲にせずに済みそうだ。

魔法資質のない者の末路を見て逆に自信がついたのか、他の生徒たちもまばらにはあるが黒い煙に挑戦し始める。今度は弾き出される者はいなかった。

「それじゃあ二人とも、どうせだから一緒に行こうか？」

「言われなくても、ヒースのためならわたし、どこにも一緒について行くから」

「って言うか、何かさっき心の底からほっとしたオレがいたんだが、気のせいかな？」

微妙にずれた返事と共に、僕達は黒い煙に向かって歩く。

あと三步で広場の境目——黒煙で見えないが地面の切れ目に到達する。足の先が黒煙に触れる。

「わっ」

瞬間、視界が暗転し、僕は何もない暗闇の空間に放り込まれた。

「あれ、アリス？」

見回してみるが、アリスの（そしてついでにオリも）姿はどこに

もない。これもこの魔法の効果なのか、腕を伸ばして確認してみようにも、とにかく真っ暗なので方向どころか平衡感覚も判然としない。

「……とにかく進んでみようか、メロン」

右肩に感じる重みから、にやあと返事が返ってくる。方向が分からないながらも、とにかく僕は前へ歩を進めてみる。

すると不思議なことに、しばらく歩いていると、妙に身体が重くなっていく感覚があった。最初は気のせいかなと思ったが、足を動かせば動かすほど、まるで重石でも付けているかのように、歩みが重くなっていく。

（——なるほどね。これが魔法資質の測定法ってわけか）

額に浮かぶ汗を拭いながら、僕は納得する。

要するにこの煙——というよりこの空間は、中にいる者の魔力を原動力に足場と隔離の魔法を発動させているのだろ。最初は大したことはないが、船に近づけばその分だけ、吸い取られる魔力も増す。

「うん、中々良く考えられているね。単に魔力量が高いだけじゃ抜けないようにしてる」

同意するように、メロンがにやあと頷く。

これは単に魔法力を測るためのものではない。自分に宿る力を、どれだけうまく使いこなせるかを問う試験なのだろう。独学で魔法を学んできた新入生に対して、随分とえげつない方法を使うなと思うと同時に、ある期待が芽生える。

もしかしたら、これからの学校生活、思ったよりも楽しめるかもしれない。

そう考えると何だかとても楽しくなってきた、僕は思わず口元が緩まる。こんなのどうってことないが、少なくとも母上の謀略以上のことはありそうだ。

まあとりあえずは目先の問題だ。僕は一度、大きく深呼吸して心を落ち着ける。

必要なのは、搾取される魔力の軽減と、効果の効率化。

頭の上からカーテンを被るようなイメージで、僕は全身に薄い魔力の膜を張る。そうやって外部に放出される魔力を遮ると同時に、足場を形成するための魔力を制限し、最小限の面積だけを作り出せるように出力を調整する。

まるで鉛を引きずっているような足を、僕はさらに一步前へ向かって踏み出す。途端、煩わしいと感じていた足枷の感覚が急に消えた。

あまりに軽くて、僕は危うく転びそうになる。何とか体勢を立て直し、それからまた軽快な足取りで暗い空間の中を歩き続ける。そうして迎えた終点は、思ったより早かった。

魔力の効率的運用を始めて、およそ二十メートル進んだ頃、急に視界が開かれ、遠目に見えた船の甲板が僕を出迎える。

「よつと——」

魔力で形成していた足場が消え、代わりに堅い木の感触が足の裏から伝わってくる。

「——おや、また合格ですか。しかも二人。今年はやけに多いですね」

いつの間にこちら側へ移動していたのか。少し驚いた様子で、リジー先生が口元に手を当ててる。そのすぐ隣には、フードで顔をすっぽりと覆った一年生らしき人物が佇んでいた。よく見ると、広場でメロンを可愛がってくれた女の子である。

それに僕はやや驚いたが、その前に先生の言葉が気になった。

「二人……？」

戻ってきた五感の感覚に酔いそうになりながら、僕は左右に視線を向ける。するとすぐ右隣に、かなり疲労した様子のアリスが両膝を付いて身体を丸くしていた。

「……なにしてるのアリス？」

「……気持ちわるい……」

しわがれ声でアリスはそう言葉を絞り出すように言うと、込み上

げてくるものを堪えるかのように口元に手を当てる。そう言えば、彼女はアルコールを飲んだせいで気分が優れなかったはずだ。丸薬である程度落ち着いていたものの、あの滅茶苦茶な空間のせいで酔いがぶり返したらしい。

「大丈夫？ 背中擦ろうか？」

僕が訊ねると、アリスは小さく首を振る。

「……今触られると、どうにかなっちゃいそう……」

「うん？」

「なんでもない……」

とにかく、大丈夫と言いたいらしい。もっとも放っておくのもそれはそれで気が引けるので、寒くならないようにアリスの肩に自分のローブをかける。

ちようどそのとき、リジー先生が僕らのところにやってきた。

「まずは試験合格おめでとうございます。Aクラス認定は、あなた方で三人です。おや、あなたは確か――」

「ヒース・ハスナーです、先生。こっちはアリス・リ・ペルネート。ちよつと気分が優れないみたいなんです……」

「ああ、魔力疲労ですね。無理ありません。この試験ではよくあることです。しばらくすれば治りますから、安心して構いませんよ。それよりあなたの方こそ大丈夫なのですか？」

僕は平気ですと頷く。リジー先生はそれに満足そうな顔をする。

だが直後、先生が僕らの斜め後ろに目をやり、引きつった顔になる。なんだろうと思いい後ろを振り返る。瞬間、外の景色を遮っている黒煙が内側から爆発した。

「うわっ!？」

反射的に腕で顔を庇い、一体なにが起こったのかを確かめるため、うつすらと目を開ける。

辺り一面に炭を塗りたくったような視界の中、ボロボロのローブをまとった女の子が、呆然と立ち尽くしていた。

「……四人目、ですか」

魔法で黒煙の直撃を防いだリジー先生が、呆れ混じりに呟く。

「ええっと、リジー先生？」

「なんでしよう、ハスナー」

「……あれも合格なんですか？」

「……言いたいことは分かりますが、条件は満たしています。見たところ力づくで煙を吹き飛ばしたようですが……こちら側まで抜けてきたわけですから、合格には違いありません」

そう言いながらも、リジー先生自身、明らかに納得していない口調であった。煙が晴れ、こちらに気付いた少女が、直立不動の姿勢になって固まる。

「合格おめでとうございます。あなたで四人目です。お名前は？」

堅い口調でリジー先生が訊ねると、女の子は針でも踏んだみたい
に飛び上がる。

「は、はははいつ、さ、サクラ・ミヤギです！」

かなり緊張した様子で、サクラと名乗った女の子がフードを脱ぐ。
ざらついた布の下から、カラスのような艶やかな髪が露わになる。

「あ」

僕は思わず声を上げる。

「はうつ！？ えっとあの、ごめんなさい！ あたし何か——あ」

翡翠の瞳と目が合う。この国ではあまり見かけない作りの顔が、
だんだん驚きへと変わっていく。

「ああっ！ さっきの貴族様ですね！？ ごめんなさい、ちゃんと
お礼も言わずに逃げてしまっ！」

「いや、お礼はちゃんと聞いたから。えっと……サクラだっけ。貴
族様って——もしかして君、平民？」

「はい！ あたしは聖教国から流れてきたお爺ちゃんの孫ですので、
運命の齒車が狂いでもない限り疑いの余地なくただの平民です！」

何て、凄まじく自分を卑下した台詞を言う。それに僕は、思わず
笑いが込み上げてくる。

「そんなに畏まらなくてもいいから。僕はヒース・ハスナー、こっ

ちはアリス・ペルネート。同じAクラス同士、これからよろしく」

「……よろしく」

危なっかしげに立ち上がり、アリスが消え入りそうな声でぼそりと呟く。

「わっ、こ、こここちらこそよろしくお願いしまひゅえ——っ!？」

途中で舌を噛んだらしく、サクラは口元を押さえてうずくまる。

先ほどの爆発といい、中々面白い子だ。

そんなふうにあ挨拶している内に、サクラによって吹き飛ばされた煙達が元の位置に戻っていく。それを何となく眺めていた僕だったが、ふと偶然、気になるものを見つけた。

「ヒース、どうしたの……？」

アリスの質問に答えず、僕は煙に近づくとその場にしゃがみ込み、砂を掘るように黒煙をかき分けてみる。すると驚いたことに、煙の中から船体にしがみついている腕が現れた。

見覚えのある腕だ。歳のわりには鍛えられていて、あちこちにタコがある。手には猫に引っかかれたような真新しい傷があり、ちょうど自分の肩に置かれている爪と合致している。

「……アリス、せっかくだしあっちの子と挨拶してきたらどう？」

「ヒースがそう言うなら……」

突然の提案を疑いもせず、アリスは小さく頷くとサクラとフードの少女のところへ駆けていく。僕は首にかけている懐中時計を取り出す。

時間はもうそろそろ一時間を回る。もう新入生は全員試験に挑んだだろうし、リジー先生の口ぶりからして、Aクラス合格者がこれ以上増える見込みはないだろう。

「よし」

決断は早かった。僕はもう一度煙をかき分けて謎の人物の腕を再度見つけると、船体にしがみついている指の間に自分の指を食い込ませて、引き剥がしにかかる。煙に隠れている本体が激しく抵抗するのが伝わってくるが、これだけ長く黒煙に包まれていれば、魔力

の方も限界だろう。

じわじわと真綿で首を絞めるように、少しずつ指に力を加えていく。

「なにをしているのですか、ハスナー」

と、あともう少しで落とせそうだったところへ、こちらの様子に気付いたリジー先生が声をかけてくる。

「……………いえ。先生、実はここに、船にしがみついている腕があるんですけど、どうしたらいいでしょう？」

心の中で落胆と共にため息をつき、しかし顔にはそんな感情をおくびにも出さず、僕はリジー先生に訊ねる。

「腕ですって？」

リジー先生は怪訝そうに眉根を寄せて、黒煙と船体の境界で必死に抗っているそれを見下ろす。

「……………一応、この者も合格ですね。引き上げてあげなさい」

もう一々驚くのも馬鹿らしくなったのか、リジー先生はそう言うのとさっさと視線を戻す。

僕は思わず舌打ちしたくなるのを我慢して、さっきまで彼を突き落とそうとしていた両手を救いの手に変えて、黒煙の中から引っぱり上げる。

「——ぶはあっ！ はあ、はあ……………」

予想通り、しがみついていたのはオリだった。彼は海中から助け出されたように肩で大きく息をし、まるで悪魔に追いかけられた末に地獄から生還した獄囚みたいに疲れ切った顔をしていた。

「やあ、大丈夫オリ？ まったく、こんなに酷い姿になって…………あんまり無茶すると、親友である僕の心が安まらないじゃないか」

無駄に面倒事が増えるからというのは、先生がいる手前、心の中にしまっておく。

オリが今にも死にそうな目で『犯人は分かっている』と睨み付けてくる。僕はそれに笑顔で応えながら、ロープの中で丸くなっているメロンをちらりと見せる。

「……………」

青ざめたオリはあっさりと白旗を振る。がつくりとつな垂れる友人の姿に満足した僕は立ち上がると、お互いに自己紹介を交わしている三人の所へ戻る。

「アリス、オリも合格したみたいだよ。そこで倒れてるから、罵詈雑言の一つでも送ってみたら——って、アリス？」

肩に手を置いても反応がないので顔を覗き込んでみると、アリスはまるで石のようになって固まっていた。その隣では、同じく自己紹介も兼ねて挨拶していたと思しきサクラが、そのままの姿勢で同じように石像と化している。

「いったいどうしたの、二人とも？」

目の前で手を振ってみるが視線はピクリとも動かない。すると、背中から苦笑が聞こえた。

「——すまない。どうもちょっと驚かせてしまったみたいなんだが……ミス・ペルネートもミス・ミヤギも、さっきからずっとこの調子なんだ」

困りながらも凜々しい声はまるでハープの音色を聞いているようであり、奥にある種の強さを窺わせる。

その声が気付け薬になったのか、微動だにしなかったアリスが声を震わせる。

「——り、りりりり、リーア様……っ!？」

上ずった声と共にフードの女の子を指さし、呆然となるアリス。彼女にしてはかなり珍しく、自分で自分の頬をつねって、これが夢じゃないか確かめまですている。

「リーアさま……?」

初対面の貴族同士なら、せめて?卿?を付けるはずであるが——公爵家の彼女にしてはまたもや珍しい呼称に、僕は改めてフードの少女を見る。

「ああ、そう言えば君にもまだ自己紹介してなかったな」

そう言う少女は口元に微笑を浮かべ、今まで顔半分をすっぽり

と覆い隠していたフードを脱ぐ。

まず印象的だったのは蒼天のように鮮やかな髪だった。フードと一緒にマントを脱いだ瞬間、少女の後ろで太もみにまで届きそうな長い髪が、まるで川のようにさらりと流れる。同時に露わになった顔は、それでもやや前髪に隠れ勝ちだったが、ランタンの光を映す金色の瞳だけは、力強くその存在を主張している。そしてその強すぎる二つの要素をうまく引き立たせるかのように、顔立ちも非常に整っていた。まるで、神さまが自らノミを振るった——とまでは言わないが、寝起きついでに適当に作っておいたくらい的美貌が、光量の足りない夜空の下からでも窺える。そして胸元には、アルケーの紋章が彫られたブローチがあった。

「初めまして。アルケー王国第一王女、リーア・アルケーだ」
少し癖のある髪を手櫛で整え、この国で最も高い地位にいるはずのお姫様は、天使のような微笑みを浮かべる。

「……」
いきなりすぎる状況に、さすがの僕もしばしの間言葉を失う。

しかしすぐに、気になることが頭を過ぎったおかげで正常な判断力を取り戻す。

「……………はじめまして？」
「うん？　そういえば違ったな。正確には君とは二回目か。まあその猫くんを渡したただだし、はじめましてで良いだろう」

勝手に一人で納得すると、リーアは僕の肩に手を伸ばし、メロンの頭を撫でる。

「わあホント、かわいいネコちゃんです！」

と、やっと石化から回復したサクラの手も伸びてくる。メロンはされるがままになって大人しく撫でられ、心地よさそうに、にゃーと喉を鳴らす。僕はそれに心の中で苦笑を返した。

「——ああえっと、僕も自己紹介がまだだったよね。ヒース・ハスナーです。これからよろしく、リーア」

僕の挨拶に、リーアは少し驚いたように目を見開き、しかしすぐ

に親愛の笑みを浮かべる。

「こちらこそよろしく、ヒース。正直私のような身分の者がカルネティアに来て良いものか不安だったが、どうやら君とはいい関係が結べそうだ」

握手のためにリーアが手を差し出す。僕も同じように握手しようとしたが、そこに横やりが入る。

「……それはダメ。この人には先約がいる」

いきなり思考力を取り戻したアリスが差し出した腕を強引に掴み、そのまま所有者の意志を無視するように強く胸に抱きしめる。気のせいか、その瞳には濃い警戒の色がある。

「は……？」

リーアは啞然となる。それはそうだろう。仮にも王族と貴族の交流をこんな風に邪魔するなど、普通なら考えられない。僕の態度も大概であるが、これから学友になるのならまあ、ギリギリ許容範囲である。しかしアリスのこれは、最早失礼だというレベルを越えてあまりある。

「……いきなり何を言ってるんだ、君は？」

今までこんなに攻撃的な接し方をされたことはないらしく、リーアは困惑したようにアリスと僕を交互に見る。が、すぐに何かに気付いたような顔になり、ぽんと手を叩く。

「——なるほど、そういうことか……。安心してほしいミス・ペルネート。私は別に、君の物を横取りしたりはしない」

「——本当……？」

「ああ、我らフレリアルルの神に誓って。彼だって、別に金や地位を優先する者ではないのだろう？」

「………はい」

「うん？ 気のせいかな間が空いていたような気がするが、まあいい……。そうであるなら、例え天地がひっくり返ったとしても、この先私達の道が重なることはない。むしろ喜んで応援させてもらおう」
「姫様……！」

「リーアと呼んでくれないだろうか、アリス。その方が私としても嬉しい」

「じゃ、じゃあ、リーアで……」

なんだかよく分からない内に仲良くなったらしく、アリスとリーアはお互いに強く両手を握りしめる。

「あ、アリスさんってすごいですね。あっという間に姫様と仲良くなっちゃいました……」

隣でサクラが感心したように両手を合わせる。

僕も素直にすごいと思う。というか相方の方も、よくあれだけのやり取りでアリスの独特な感性に合わせられたものだ。

「おっと、そうだった……」

色んなことがあって忘れるところだった。僕はロープの中から透明の液体が入った瓶を取り出すと、お姫様に声をかける。

「リーア、はいこれ」

「ん？　なんだこれは？」

僕から瓶を受け取ったリーアは、怪訝そうに眉をひそめる。

「古い友達からの言伝」

「言伝？」

出来ればしまっておきたかったが、約束である。無力な自分を非常に、絶望的に、これ以上ないくらい痛感しながら、僕はそう説明する。

「……ヒース？　今までで一度も見たことがないくらい楽しそうな顔してない……？」

「まさか」

リーアが瓶の蓋を開けようと何度も手首を捻るのを眺めながら適当にそう相槌を打つ。

やがてパカッという軽い音と共に、瓶の蓋が開く。

「どう見ても普通の水みたいだが……ん？　うわっ、なんだこれは！？　体にまとわりつ——いひゃああああアハハハハハひゃ、ひゃめ、止め、止めて、これいじょひひひひええアハハハ——」

突然瓶の中の水が暴れ出し、スライムのようにウネウネと動いて飛び出したかと思うと、それは手の形になってリーアに絡みつぎ、首を、脇を、肋骨の間、足の裏をこれでもかとかばかりにくすぐりはじめる。

「り、リーア!？」

「あ、行かない方がいいよ。飛び込んだら最後、僕が止めるまで一緒にくすぐられるから」

助けようと駆け出しかけたアリスは、僕の言葉に慌てて急ブレーキをかける。

「ひ、ヒース今すぐ止めないと! このままじゃ失神しちゃうよ!？」

「まあ良いんじゃない? 本人も望んでいたし……」

「一言も言っただけですよ!?! あああ姫様、今助けま——」

「はいストップ」

勇敢にも止めに入ろうとするサクラの行く先をいつの間にか肩から降りたメロンが遮る。

「はう!?! ネコちゃん……」

サクラの前に立ちふさがるメロンは、愛嬌のある鳴き声をし、ゴロンと、猫好きなら一瞬で悩殺されるような可愛いポーズをとる。

「あ、ああああ——ね、ネコちゃん……こっちおいで、ほらほら」
サクラはお姫様の存在をすっかり忘れてその場にしゃがみ込む。

「あれ? そう言えば笑い声が静かになってるような……」

ふと視線を戻すと、リーアは俯せになり、まるで事切れる寸前のように痙攣していた。笑いすぎて呼吸もままならなく、苦しそくに肩を大きく上下させて震えている。

もうそろそろ止めないと失神してしまうだろうなと思いながら、僕はたつぷり三十秒くらいその様子を見物してからスライムに戻れと命じる。

「……っ、ひい——、ひい——……」

枯れ果ててネズミ一匹満足に仕留められないヒョウのように、リーアは床に突っ伏したまま動かなくなった。

「……死んだ？」

「——勝手に殺すなっ！！」

驚いたことに、リーアは跳ねるようにして立ち上がると、怒り心頭に発したとばかりに腰の剣に手をかける。

「よくも私にあのような仕打ちをしてくれたな！ 友になれるかと思つて数分と経たぬ内にこのような……きさま、当然覚悟は出来ているのだろつな……？」

悪魔も裸足で逃げ出しそんな形相で睨んでくるリーア。僕は深々と嘆息する。

「と言われても。僕は薄情で仁義の？じ？の字も知らない底抜けの愚か者にこれを渡して懲らしめるようにって頼まれただけだし」

「そうかそれが最後の言葉か」

完全に据わった目でそれだけ言うと、リーアは腰のレイピアを抜く。

「——！？ ダメッ！」

「や、やめてください姫様！」

飛びかかろうとしたお姫様を、アリスとサクラが咄嗟に押さえにかかり羽交い締めにする。

「離せ二人とも！ こんな屈辱は生まれて初めてだ！ 不敬罪など適用したくもないが、こいつにはそれでも足りん！ そもそも君たちが止める理由はないだろう！？」

「人殺しは十分止める理由に入りますよ！？」

「た、確かにヒースは一にお金、二に女の子を地でいつてるし、この世界の全てが混沌に満たされてしまえばいいと常々思ってるような人だけど、そんなことしちゃダメ！ リーアが殺されちゃう……！」

「やはりろくでもない男ではないか——って、君はどっちの味方だアリス！？ 両方貶してどうする！」

「多分、どっちも貶めているわけじゃないと思うよ」

ただ、色んな意味で取り繕うということを知らないだけで。

そんなこんながあつて、この騒ぎは試験の後片付けをしていたり
ジー先生が戻ってくるまで続いた。

「無垢な頃の回想？」

「おにいちゃんおにいちゃん！　すごい見つけた！」

七歳のときだった。

まだ僕にとつての世界が、母上と妹、それに片手で数えるくらいの人間しかいなかった頃。

ハスナー家唯一の領地である山中の湖近くで遊んでいると、自慢の妹であるユリが突然そんなことを叫んだ。

「何を見つけたんだい、ユリ」

「えーっとね、変死体ー」

無邪気な笑顔でそう報告する我が妹。手を引かれて付いて行ってみると、湖の岸に横たわる同い年くらいの少年を発見した。かなり長い間水に浸っていたらしく、安物の服はびしょ濡れで、皮膚はしわだらけだった。

「ユリ。これは変死体じゃなくて水死体って言うんだよ」

「ごめん……ユリまちがえた」

「いいよ気にしないで。そのかわり、今度からは間違えないようにね」

「うん！」

いつものように仲むつまじい会話をしながら、僕はその残骸の傍にかがみ込む。何か金目の物はないかと調べてみるけど、目に止まるような物は持っていなかった。ほとんど着の身着のまま流れ着いたようだ。迷惑なことこの上ない。

「……仕方ない。今夜のメロンの夕飯にでもしようか。この前捕まえた大蛇の肉もなくなってきたし」

「そうしよそうしよ！　メロンきつと喜ぶよ」

「だね。まあさすがに生はどうかと思うけど……そうだ」

僕は一つ思いつき、父から借りた杖を取り出すと、人の頭ほどの火球を生み出して、小さく胸を上下させて横たわる骸へまっすぐと

「——うえあつっ!!?」

動物的本能からか、危機一髪のところ目を見まし火の玉を避ける少年。

「あれ？ 生きてる」

「みただね」

「なんだ」

がつくりと落胆するユリ。僕も同じだった。これから良いところだったのに。

奇跡的に息を吹き返した少年は、ぐしょぐしょに濡れた小麦色の髪をべつとりと顔に張りつけたままぜえぜえと荒く息をする。

これが、以後五年にわたって、シンプルだった僕の世界に図々しく居続けることになるオリオン・クロム・アスティンとの、初めての邂逅だった。

「無垢な頃の回想？」（後書き）

2・1「爽やかな朝」

試験を終えて船に乗り込み、色々な騒ぎのあった翌日。ヴァルキユリアの大ホール。

今まで一度も触れたことのないような心地良い羽毛布団にくるまれて一夜を過ごした僕を出迎えたのは、まるで天国のような朝の一時だった。

見上げる天井はガラス張り。日光は良好。思いつき腕を伸ばせる広い食卓には染み一つなく、朝の爽やかな風が美味しい空気を運んでくる。目の前のテーブルに並べられる野菜はどれもが取れたてのような新鮮さを保っており、パンは絹のように白い。

付け加えるなら、今僕らが座っている丸テーブルの席は、広大なホールの上に設えられているバルコニーのところにある。すぐ傍の手すりから眼下を見下ろせば、B、C、Dクラスの同級生および上級生が、非常に硬い黒パンと安くて薄い味付けのスープに舌鼓を打っている姿を窺うことができる。

「まるで僕らを崇め平伏しているようだね」

「その内刺されるぞ貴様」

向い側でフォークをカチャカチャさせていたリアが半眼で睨んでくる。昨夜のダメージがまだ尾を引いているのか、声が若干枯れていた。それでも肌を刺す眼光は、この年齢にしては見事の一言に尽きたが。

ちなみに並び順は右からサクラ、オリ、リア、アリスである。周りにはAクラスの上級生達が同じように丸テーブルを囲んでおり、朝食を摂りながら穏やかに談笑していた。適度に配された自然の緑も相まって、まさに絵になるような爽やかな光景だが、このテーブルだけはそんなものとは無縁である。画家が描けば？一触即発？というタイトルが付くこと間違いなしだ。

僕はコーヒーを飲みながら言う。

「心配してくれなくても、ちゃんと分別は弁えてるから」
「？分別？の意味をきちんと把握しての台詞だろうな？　あと、誰も心配してなどいない」

棘のある声でリーアが突っかかってくるのを無視して、僕はベーコンエッグを口に運ぶ。お姫様は完全に僕を敵と見なしているようで、殺気を隠そうともしない。

（――何か気を悪くすることでもしたっけ？）
心当たりはない。

それはもうこれっぽっちも。

塵の欠片すら思い浮かばないほど。

現在、ヴァルキュリア号はユーフラン島の港に停泊している。試験終了後にあてがわれた部屋（Aクラスの全員が個室だった。その他の生徒は雑魚寝だったらしい）で眠りに落ちてから出港したらしい巨大船は、朝にはもうこの島の港に着いていた。

周りには大小様々な建物が並んでおり、聞くところによるとカルネティアで働く大人達の大半は、ここに住居を構えているということだ。試験後の真夜中に積み込んだ物資を降ろしているそうで、終わるのは昼に差し掛かってからという話である。

「ヒース、あーんして」

いつも通り抑揚のない声で、アリスがソーセージを差し出しながら身を寄せてくる。言われたとおりにすると、ソーセージの美味しい肉汁が口の中に広がった。

「どう……？」

「うん、とっても美味しいね。ほらアリスも」

お返しに、僕はデザートのワッフルをアリスの口に運ぶ。

「美味しい？」

「天国にも昇れそう……」

今昇天したとしても悔いはないという顔になるアリス。こんな彼女を見るのは、去年の誕生日以来である。あの日、手土産に朝一番で仕留めた熊の料理を持っていたときも、こんな風に喜んでいた。

もつとも、それを仕留める過程で、『熊は蜂蜜が死ぬほど苦手』という僕の言葉を信じて全身に蜂蜜を塗りたくった状態で熊に挑んだオリは、全治二週間の怪我を負ったが。

「——それにしても。結局三人とも同じになっちゃったなあ……。」

——ん？　そう言えば今日はずいぶんオリが大人しいような……？
いつもならこちらが何か喋る度に理不尽極まりない突っ込みを入れてくるはずなのだが。

斜め向いに目をやると、オリはまるで壊れたブリキの玩具のように関節を軋ませながら紅茶をすすっていた。

「……なにしてんのオリ？」

「なっ、なななにつてなにが！？」

「いや、いつもの腑抜け顔が倍でひどくなってるから」

「お、おオレはいつもフヌケ顔だ！」

本格的に様子がおかしい。

と、オリの目が一瞬、さっきから隣で黙々と朝食を摂っているリ
ーアを見た。

（ああ、なるほど……）

僕は納得して、心の中でポンと手で相槌を打つ。

そう言えばオリは、あのまま起き上がることが出来ずに寝室へ運ばれていったはずである。つまり彼がお姫様と顔合わせしたのは、今日のこの席が初めてということになる。

ちなみに席順は、それぞれの要望が反映されたものになっている。具体的には、僕の近くを嫌がったお姫様はアリスとオリの間。女の子が隣なら誰でも良かった僕はアリスとサクラの間という風にだ。アリスは僕の隣ならあとはどうでもよかったらしく、サクラに至っては、リーアとアリスが隣だと息が詰まりそうだという金銭的及び身分的な理由から、わざわざ僕とオリの間を選んだ。

そういう経緯での、この席順なわけである。が、実はこれ、オリの意見は何一つ入っていない。彼が朝食の席に遅れてきたのが最大の理由であるが——それにしても、お姫様の隣の席になってしまっ

たのは予想外だったのだろう。しかもそのお姫様の機嫌がこの上なく悪いときている。彼がガチガチに緊張してしまうのも、無理からぬ事だ。まあ、僕には関係ないが。

「あの、コーヒーのおかわりどうでしょうか？」

いつの間にかコーヒーポットを手に立ち上がっていたサクラが、控えめにそう訊いてくる。

ちょうどカップが空っぽになっていた僕は笑顔で頷いた。

「ああ、じゃあもう一杯もらおうかな。でもサクラ、別にこんなことしなくても、おかわりなら自分でやるよ？」

「い、いえいえ！　だってヒース様は貴族じゃないですか！　こういうのは平民のわたしの仕事ですから」

「そんなの気にしないでいいって。大体カルネティアじゃ実力が第一で、身分なんてあってないようなものだって話だし。コーヒーなんて、下の連中に言えば勝手に注いでくれるよ」

途端、足下から殺意に満ちた気配が突き刺さるのを感じたが、気にしない。僕はサクラを席に座らせて、一つ一つ噛み砕くように諭す。

「今までとは違うんだから。サクラがこれからすべきなのは、優秀な成績を残すことと、楽しい学校生活を過ごすこと。身分は二の次三の次。無視したって構わない。お姫様だってきつとそう言うはずだから」

「……わざわざ本人に聞こえるようにそんなことを言うのは卑怯極まりないと思うが……まあ、そうだな。貴様の言葉に同意するのは癪だが、別に間違っではないない」

黙々と食事を摂っていたリーアは渋々ながらも同意する。

「り、リーア様がそう仰られるのなら、できるだけそうします……」

あ、あの、ありがとうございます、ヒース様——」

「？様？はなくていいよ。普通にヒースで」

「あ……はい！」

元気のいい返事に、僕は満足して残りの食事を片付ける。そんな

僕らの様子を、リーアが怪訝な顔で見ていた。

リジー先生がホールに現れたのは、もうすぐ太陽が真上にこようかという頃だった。

「あと一刻ほどで船はカルネティアへ入場します。生徒の皆さんは自分の荷物を持って甲板に集まるように」

僕たちはすぐに部屋に戻り荷物をまとめると、ほとんど同時に甲板に向かった。生まれて初めて見るカルネティアだ。期待は否応にも膨らむ。

甲板に出ると、潮の匂いが鼻腔に広がり、爽やかな風が髪を揺らす。人の手がほとんどはいっていないからか、実家の山を思い出す。船が動き出すまで退屈を持って余さないようにと気を配ったのか、アリスが皆に（というか主に僕に向かつて）島についての説明を始める。彼女の祖母は本の蒐集家で、物心ついた頃からそれらを読み耽っていたアリスは、普通は誰も知らないような知識をたくさん持っていた。

「本だと、この島の奥には、ずっと昔に建てられた大きなお城の遺跡があるんだって」

「へえ。もしかして古代文明の？」

「ううん。フレリアル教の成立よりも前みたい」

アリスが首を横に振りながらそう言う。

フレリアル教は、今から約六千年前に教祖フェアリ・フレリアルによって広められた宗教だ。

今から六千年前。滅びゆくはずだったこの世界を救った神、アーカーシャ。

『不条理の破壊者』、『永遠と慈愛の神』、『願いを叶えし者』

——様々な名で呼ばれるその神は、背に広がる翼をもって理不尽を強いていた旧支配者達から人々を解放し、寿命の尽きかけていたこ

の世に永遠をもたらした。その後彼は、自らの子孫と人々に奇蹟の力？魔法？を授け、天上の世界へと昇っていった。

やがて彼の子孫は国を築き、以後永きにわたり世に繁栄をもたらした——大まかにはそういう話である。少なくとも、フレリアル教の都合の良い部分だけ取り上げられた、歪んだ歴史書では。

「珍しいね。アルケーはともかく、聖教国がそんな遺跡を野放しにしておくなんて」

フレリアル教の総本山である聖教国は、神暦以前に築かれた象徴——つまりアーカーシャが否定した旧支配者達の遺物を認めていない。連中の性格からしたら、とつくの昔に破棄して一部の価値ある物を換金していてもおかしくないはずなのだが。僕なら絶対そうする。

「別にこちらも向こうも、野放しにしておくわけではない」

こちら話を聴いていたらしく、リーアが苛々とした口調で話に割り込んでくる。彼女にしてみれば、まるで身内の怠慢を批難しているような僕らの会話は、無視するには我慢ならないものだったのだろう。

「あの遺跡には、アーカーシャの剣があるのだ」

「アーカーシャの剣？」

「聖典に記されている天罰の光の事だ。『アーカーシャは腐敗した天上の世に絶望と怒りを抱き、浄化の光を放つ剣をもって天空の城を地に落とした』——あの遺跡には、今もその剣が城の天辺から地の底まで突き刺さっている。もし遺跡を壊そうとすれば、剣にも傷が付くのは必然だ。最悪折れるかもしれない。だから両国とも放置している。解ったか」

向けられる感情は変わらず非友好的であつたが、僕は納得すると同時に、深く感心した。

「凄いねリーア。聖典をそんなに細かいところまで覚えているなんて。さすが、有能な下僕は違うね」

「ふ、ふん……ま、まあ小さい頃から教えるのがうまい先生に習っていたからな——ってちよつと待て貴様！ 褒められて聞き流しそうになったが今私のことを下僕と言わなかったか！？」

「ああごめん。下僕のように扱ってくれて構わないって言われたせいでつい癖が……」

「そんな事を口走った覚えはない！」

まったく。せっかく賞賛してあげたというのに、どうしてこのお姫様はこんなに我が儘な性格なのだろうか。

僕があからさまにため息をつく、リーアはさらに眉間のしわを深くする。

そうこうしている内に、積み荷を降ろし終えたヴァルキュリア号は港から浮遊しながら陸に上がり、山と山の間にある断崖の中を縫うように進んでいく。巨大な岩壁に囲まれた景色は全く壮観で、同じく甲板に出た新入生の面々は口を大きく開きながら、遠い青空を見上げていた。やがて出口に差し掛かった頃、目の前に広がる湖の向こうに、巨大な宮殿が鎮座しているのが見えた。

「あれが、カルネティア……」

周りから感嘆の息が漏れ聞こえる。建物の大きさは王都にある王宮と同じくらいだろうか。昔読んだ書物に描かれていた、聖教国の大聖堂と少し似ている。周りを六つの巨大な塔が囲んでおり、そこから響く鐘の音が、皆を歓迎するように大気を震わせる。

ヴァルキュリア号は門を通り抜けると湖の上を進み、そのまま宮殿の中へと続く水門へ入る。内部はレンガでできた倉庫のようになつており、壁に飾られた燭台が、煌びやかな火を灯しながら僕たちを迎えた。

「一年以外の生徒は通常口から降りて大広間へ向かいなさい」

リジー先生の声が空間に木霊する。足下から小さな振動が伝わり、船の側面から階段が伸びると、石造りの廊下にくつつく。

「一年以外は……じゃあオレたちはどうするんだ——って、うお！？」

ちょうどそのとき、今度はわりと近い揺れが足下を通り過ぎ、甲板の切れ端から、上に向かう別の階段が現れた。

「僕たちはこっちからみたいだね」

「そのようだな……」

リーアの声はやや硬かった。

「ではAクラスを先頭に階段を上がりなさい。先にある一本道の廊下を進めば大広間に着きます。急いで」

今更ながら期待と不安の入混じった顔になる新入生達に向かって、リジー先生が手を叩いて促す。

「じゃあ行こうか。オリ、先頭お願い」

「おう、任せろ……って、何でオレ？」

「だって主の歩く道を露払いするのが犬の——じゃなかった。友達の仕事でしょ？」

「今はつきり犬って言ったよなあ！？ しかもやること訂正してねえし！ お前が先頭歩けよ！」

「……オリ？ わたしの小さい頃からの友人に命令するなんて、どういう了見？」

「オレもお前の小さい頃からの友人のはずだろ！？」

「はあ……ヒース、任せて。わたしがちゃんとするから」

「そんな。いいよアリス。オリの我が儘は今に始まった事じゃないんだし」

「なんでオレが悪者！？」

「……いつまでじゃれ合っているつもりだ。私は先に行くぞ」

結局、リーアが先頭で進むことになった。その後ろにはオリとサクラ、そしてアリスと僕が最後尾という順である。さらに五歩ほど離れてBクラスの面々が続く。

「はあ……何で僕がオリの後ろを歩かなきゃ……」

「いやいやいや、お前さつきオレに前を歩かせようとしてなかったか？」

「そうだけど……実際オリごときに先を歩かれてみると色々氣にく

わ——違和感があつて」

「お前本当は隠そうという気すらねえだろ！ 絶対ケンカ売るつもりで言ってるだろ！？」

「まさか。いやだなあオリ、変な言いがかりはやめなよ。僕は君のことを、スプーンにすくった水と同じくらい大切に思っているのに」
「浅い！ これ以上ないくらい浅いじゃねえか！？」

叫びすぎて、ぜえぜえと息を荒くするオリ。いつもならまだ平気なはずだが、昨日の疲労がまだ抜けきっていないようだ。これ以上疲れさせると後が面倒なので、そろそろ切り上げよう。

しかしそうなると途端に暇になるのも事実で。

「アリス、結婚しない？」

「式は聖教国の大聖堂が良い……」

「ごめん、半分冗談」

「むう……」

ややむくれた顔になるアリス。基本彼女は言ったことを素直に受け入れてくれるので（何故かオリには反抗的だが）反応としては面白味に欠ける。まあ、これはこれで楽しいのだが。

（うーん……）

階段を上りながら、僕は難しい顔で首を捻る。

と、そのときだった。後ろから付いてくるBクラスの一人が、長い杖の手持ち部分を突き出し、僕の足を引っかけようとしてきた。

片眼鏡のレンズに映るのは、いかにも高い服を着こなした金髪のボンボン。ちなみに男。

（なんだ……）

軽く失望。妬みか嫉みか侮りか。いずれにせよつまらない。これが女の子だったなら、笑いながら初めの頃のアリスのように徹底的にちょうきよ——もとい、更正させてあげたのだが。

僕は杖が狙っている右足を進めると見せかけてボールを蹴るように杖の先端にかかとを叩き込む。杖の柄は男子生徒の握った手の内を滑り抜け、先端の部分がちょうど金髪男の股間の辺りを貫く。

「ぐえ……っ!？」

苦痛を越えた苦痛に悶絶する男子。さらに浮いた手持ち部分を思いつき踏んづけてやる。

頑丈な杖は男子生徒の急所を上には押し上げ、最早声すら出ないようだった。トドメに足の裏で杖をゴリツと半回転させてやると、金髪男は完全に沈黙した。

（さて、何かないかな………いつそDクラスとかだったら、下克上とかで楽しめたんだろうけど。でもオリより下だなんて死んでも嫌だし……）

僕は金髪のボンボンのことをさっさと頭の中から消し去って思索に戻る。後ろから何やら騒ぎ声が聞こえたが、心底どうでもよかったので無視した。

2・2「リーアの疑念」

王という存在は、常に人の上に立っていないなければならない。

小さかった頃、かつて玉座にいた祖父は、良く口癖のようにそう言っていた。祖父を尊敬していた私は、そのとおりだと思った。今もその気持ちは揺るぎない。だけど時々、息苦しくなるときがあった。

王族は生まれた瞬間から、特別な存在であることを宿命付けられている。言葉一つで国を動かし、時には与り知らぬところで人命をも左右する。見知った者も見知らぬ者も、私が背負った肩書き一つで態度を変えてしまう。死んだ兄たちもそうだった。そのことが、まるで私自身さえも鎖で縛っているようで我慢ならなかった。

一人でも良い。私が王族だと知っても決して心を取りつくろったりしない、そんな人間と出逢いたかった。

その願いは、思いのほか早く叶った。

叶った、が――

百人近い同級生らの先頭を歩きながら、私はちらりと後ろに目をやる。

一つ頭を隔てた向こうには、左目に片眼鏡をかけた、悪魔の姿があった。

ヒース・ハスナー。アリス・リ・ペルネートの幼馴染みで、昨日私を散々な目に遭わせた、間違いなく人生最大の天敵。

ヒースは前を歩くサクラと何事か楽しそうにお喋りをしていた。

快活に、時折ユーモアを交えて。普段アリスと一緒にいるからか、異性とは喋り慣れている様子である。そのアリスは、彼の隣に寄り添っていたが、意外にも彼女は、ヒースがサクラと親しくしても無頓着であった。平民如き、相手にするまでもないと思っているのだろうか。

「……すまない。オリオン――だったかな？」

「へ——？ は、はいっ！？」

突然名前を呼ばれて、小麦色の髪をした少年がびっくりして足を踏み外しかける。

「す、すみません！ お、オレ何か失礼なことでも……？」

「いや、少し聞きたいことがあったただけだ。そうだ。ついでだし、私もオリと呼ばせてもらおうかな。すまないが、ちょっとこちらに寄ってくれないか」

「は、はあ……」

オリは曖昧な返事をしながら私の隣に来る。その反応に、私はまた笑いそうになる。いつもにこやかな顔をしながら近づいてくる腐りきった貴族連中とは違って、その飾り気のない態度には好感が持てた。

「……それで、オリ。失礼かも知れないが、君はあれの友人で間違いないのだろうか……？」

「あれ？が誰を差すのかすぐに察しが付いたようで、オリはやや顔を引きつらせる。

「ま、まあ……友人っていいですか、悪友っていいですか……」

どうにも歯切れの悪い返答である。はっきりと友人と呼ぶには抵抗があるが、完璧にそうじゃないとも言えないといったところか。今朝の会話を思い返しても、結構長い付き合いであることは容易に推察できた。

「そうか……じゃあ一つ訊きたいのだが……あいつは、いつもその——ああなのか？」

言いながら視線で指し示す。

「ねえ、サクラは聖教国から来たの？」

「いえ。あちらにはお友達もいますけれど、あたしはずっとアルケ―の片田舎で暮らしてました」

「なるほどね。道理でとても綺麗に見えるわけだ」

「えうつ！？ き、きききれい！？」

「うん。まるで雑草だらけの荒れ野の中で一つだけ咲き誇る、黄色

いバラのようだよ」

「はうつ！　そ、そそそんなこと、例えお世辞でも言われたの初めてで、その、どう返事したら……」

「いや、別に難しく考える必要はないから。無防備なのは良くないけど、後ろから付いてくる肥大した雑草の山に仲間入りするよりかは何百倍もマシだし。君は君のままでいいと思うな」

「あ、ありがとうございます……」

サクラはそう呟いて、顔を真っ赤にしながら俯く。

「……………」

彼の？友人？は、たつぷり十秒以上の沈黙を挟んでから、ブリキのように硬い動作で頷いた。

「そうか……」

まるで身内の犯した大罪を認めるような彼の表情に、私は微かな同情を覚える。それをどう勘違いしたのか、オリは慌てふためいて何か言おうとした。それに私は首を振る。

「いや、別に気分を害したわけではない。ただ少しな——」

言いながら、私は心の中で首を傾げる。

（あの態度がいつも通りなら、私に対するあれはどういう……？）

思い出ただけで背筋がゾクツとなる。身体中にまとわりつくスライムの感触。人体の鋭敏なところを余すところなく蹂躪され、視界が真っ白になって危うく命を落とすかと思った。気位の高い由緒ある血筋の女性なら、躊躇なく首をはねたことだろう。かく言う自分も、現在進行形でかなりそれを実行したい心情ではあるが。

（そう言えば、古い友達がどうのこうのと言っていたな……）

確か、その言伝であんな事をしでかしたと。昨日は頭に血が上っていたせいもあって忘れていたが、そう言っていたはずだ。

（『僕は薄情で仁義の？じ？の字も知らない底抜けの愚か者にこれを渡して懲らしめるように』——だったか……）

ふざけた話だ。私をそんな人種と断定したヒースもヒースだが、そんなことを頼んだ奴も同罪だ。

もし見つけたらどうしてやるうかと、私は密かに、胸の奥底で熱い炎を燦らせた。その時、ようやく階段が終わりを告げる。一本道になっている大理石の廊下を進んでいくと、開けた円形のホールに出た。周りはぐるりと柵で覆われており、近寄って下を覗いてみるとどうやら大広間らしく、船で別れた大勢の上級生達がテーブルの席に着いてこちらを見上げていた。ホールの真上には月のような球体が浮かんでおり、その表面に自分達の姿が映し出されている。

「ようこそカルネティアへ、新人生の諸君」

全員がホールに入ると、大広間に穏やかな声が響き渡った。同時に浮遊錐ふゆうすいという、持ち主の意志で自由に宙を移動する乗り物が大広間の奥から現れ、教師と思しき大人達が姿を見せる。

中央の浮遊錐に乗っている壮年の人物には見覚えがあった。

ジオッド・フリーレン。亡くなった祖父の友人で、カルネティア魔法学校の校長だ。その両脇には副校長のジニー・ステルス先生と、かつて勉強でお世話になったシンエン・リー先生が立っている。

シンエン先生と目が合う。今年で三十歳になる彼は、一瞬だけ親愛の笑みを口元に浮かべると、すぐに元の鉄面皮に戻る。

他にも何人が見知った顔がある。シンエンの隣にいる赤毛の女性は、確かジユメル・アインシュという名で、魔法術式学会で何度か見かけたことがある。その横にいるのはダフネ・ランページ。先のテロス帝国との戦で、めざましい功績を上げた戦騎だ。

反対側を見ると、そちらにも名だたる顔ぶれがあった。フロイド・レーガニンは、『始祖竜の生態』の著者だったはずだ。幼い頃に彼の本を夢中で読み耽った結果、実際に始祖竜がいるという森に入っ
て酷い目に遭った記憶がある。その横にいる二人は名前だけ知っている。たしか、ニコロ・ポリーニとユージン・ウルバニ。依然、父に謁見していたのを見かけた。

その他、実に多くの教師がジオッド校長を中心に並んでいたが、一番左端を見て思わずギョツとなる。

そこには、黒いローブで全身を覆ったいかにも妖しげな人物が佇

んでいた。いや、本当に人なのだろうか？ フードで覆われて顔は見えないが、二つの突起が頭から突き出している上に背が手すりの半分ほどしかない。小鬼か、もしくは遠い山奥の国を支配しているという獣人だろうか。浮遊錐に貼り付けられた名札には、『シユバリエ・ナカータ』とあった。少なくとも聞き覚えのない名だ。

私はしばらくの間、呆然と真つ黒なローブを見つめていたが、大広間全体に響き渡るような校長先生の声で、はっと我に返る。

「今年も、実に賑やかな一年がやってきた。ここに新しい学生を迎え入れられたことを、私は誇りに思う。特にリーア姫を始め、実に五人もの生徒がＡクラスとなったのは嬉しい誤算じゃ。皆、惜しくない拍手を」

ジオツド校長が両手を叩く。するとたちまちそれは割れんばかりに膨れあがり、大広間に響き渡る。

いきなり矢面に立たされたＡクラスの反応はそれぞれだった。私は舞踏会でしょっちゅう大人の貴族達の注目を浴びていたので慣れっこになっていたが、オリとサクラは、とても友好的とは思いがたい視線にだらだらと汗を流していた。名門の出でもないオリにとっては居心地の悪い雰囲気だろう。サクラは貴族ですらないので尚更だ。同姓の私でも見とれてしまいそうなほど綺麗な黒髪の少女は、今にも卒倒しかねないような顔で固まっていた。

一方で、全く意に介していないのがアリスとヒースだった。アリスの方は、まあ予想通りだった。何せ侯爵家の一人娘で、しかもあの性格である。皆の羨望と嫉妬の眼差しを、まるでそよ風のように受け流している。しかしヒースまで全く同じ様子なのは驚いた。彼の神経の図太さは承知していたが——何せ王女である私にもあの態度である——この音の嵐の中、怯む素振りすら見せないとは。朝の件も含め、居心地の悪さだけならオリ以上なはずなのに、平然としている。

敵ではあるが見上げたものだ。そう心の隅で感心している内に拍手がやむ。と同時に、ヒースは何やら顔の横に手を伸ばして、そこ

から何かを取り出した。

耳栓だった。

私は危うくこけそうになった。ギリギリのところまで踏み止まると、ジオッド先生が両手を上に広げる。

「さて、それではこの後、生徒の皆にはそれぞれの寮へと向かってもらおう。それが終われば担任の教師による説明があるう。夜には各クラスの寮で歓迎会が行なわれるはずであるから、楽しみにするように。が——その前に、新入生達に私からプレゼントがある。受け取るが良い」

新入生の姿を映していた月が割れ、薄い光の膜が頭の上に落ちてくる。それが触れると同時に、身にまとっていたロンドブランドの服とローブが消え、代わりに黒を基調に赤いラインが入った服一式と革のマント、それに指輪が身体を包み込んだ。

皆も同じだった。男子は硬そうな質感の上着にズボン、女子は下にスカートという格好で統一されている。ただし他の大半の一年生と違い、私の胸元にはカルネティアの紋章である、竜をかたどった金のバッジが光っていた。推察するまでもなく、Aクラスの証だろう。

「カルネティアの学生服とマントじゃ。衝撃や温度の変化に強く、攻撃性のある魔法を防いでくれる。これからの授業で例え事故が起こったとしても、間違いなく君達を護ってくれるだろう。ある程度アレンジも可能であるから、自分で色々試してみても良い。それと、元々の服や道具は指輪に入れてある。念じれば出てくるから安心しなさい。では、解散」

「Aクラスの生徒はこちらに。私が担任です。これから寮へ案内します」

新しい制服に興奮冷めやらぬ一年生の喧噪を縫うように、リジー先生の声が耳に届く。

集まった私達が案内されたのは、宮殿の外に建っている、六つある塔の内、中央にそびえ立つ白い建物の五階だった。大人数用の浮遊錐を使ったので上への移動はあっという間に終わり、苦もなく絶景が見渡せる縦長の広い談話室に辿り着く。

「ここには全学年のＡクラスが暮らしています」

リジー先生が説明する。

「部屋はその階段を上ったところにあります。各人一室ずつ割り当てられているので、後で確認するように。ちなみに向かって左側が男子、右側が女子の部屋です。ちょうど去年手前の方を使っていた五年生が卒業したため、皆さんのお部屋はすぐそこになります。ここまでで何か質問は？」

リジー先生が訊ねると、オリが手を上げた。

「何でしょう、アステイン」

「ええつと、食事とかは……」

「ああ……」

気のせいかな、リジー先生の声が若干冷たくなったように感じた。

「……基本的に、朝食と夕食はこのテーブルに用意されています。昼食も希望すれば出てきますが、限られたお昼休みで移動の手間を考えれば、大広間のコックに頼んだ方が良いでしょう。また宮殿と各塔には売店が設置されています。ですからわざわざ毒キノコを食べに森に行く必要はありません。分かりましたねアステイン？」

「いえいえいえ！？ 何でオレだけ！？」

だがリジー先生は「さて次に――」と言ってオリの抗議を無視した。

「貴方達にとって、とても大切な話をします。Ａクラスの特権に関してです。昨夜の試験前に説明したとおり、Ａクラスは他のクラスと異なり、かなり優遇された環境が保証されています。この素晴らしい寮もその一つです。他にも下の階に設置されている実技施設や研究室は消灯時間後も制限なく利用できますし、望むのなら、高学年に混ざって授業を受けることも可能です。分かっているとは思ひ

ますが、これらは全て、貴方達の才能を伸ばし、また他の生徒のやる気を上げるためのものです。ですから貴方達は——ええそうですね、ミヤギ。例えば平民や王女であろうと、ここでは意味を成しません。ですから当然貴女も、これから一年間は、Aクラスである誇りと威厳を持つて学業に励まなければなりません。もともと、Dクラスの際で夜を明かしたいなら話は別ですが……」

「Dクラスの寮って、どんなところなんですか……？」

興味をそそられたのか、アリスが控えめな声で訊ねる。

「海岸近くのボロ屋敷です」

リジー先生の答えは簡潔だった。アリスだけでなく、その場の全員が絶句する。

確かにここに来る途中、やけに大きな幽霊屋敷が建っていたのを見た気がするが——それではDクラスの生徒は全員、毎日あの道のりを通って授業を受けに来なければならぬのだろうか。

ついさつき、ヴァルキュリア号でも三十分はかった山道の光景を思い出し、今さらながらにAクラスに入れて良かったと実感する。

「——さて、私が話すべき事はこんなところですが、他に何か質問はありませんか？」

一時間ほどだろうか。各施設の使い方や簡単な校則、授業スケジュールなどの基本的なことを説明し終えたリジー先生が、そう言っ
て私達の顔を見回す。すると、今までずっと黙って話を聞いてたヒースが手を上げた。

「何ですハスナー？」

「昨日ちらりと聞いたんですが、学年代表というのはどういうものなんでしょうか？」

リジー先生が僅かに目を細める。

「……そうですね。本来、一年生にはあまり関係のない話なのですが、今年は人数も多いことですし——いいでしょう」

少し考えるような素振りをして、リジー先生はそう言つと、皆に向かつて話す。

「学年代表というのは、その学年における最優秀の生徒のことです。その者は各学年の頂点であり、リーダーです。大抵は一年ごとに、学年末のテスト結果により選ばれますが、一年生の場合は私の判断でAクラスの中から選出します。もっとも、例年なら新入生のAクラスは一人か、多くても二人なので、それほど苦労はしないのですが……」

実に五人もの合格者を見回し、リジー先生は複雑な顔になる。

「先生、大抵はって言うのと、違うこともあるんですか？」

オリが質問する。

「ええ、ごく希にはありますが。例えば、誰かが今年度の学年代表が自分達に相応しくないと判断した場合、その生徒は学年代表に対してトリニティというゲームを申し込むことができます。勝利すればその者に代わって、学年代表の座を就くことができますが、逆に敗北すればクラスを一つ下げられるか、もしくは代表生に従事することになります。ですから、トリニティを申し込む生徒はほとんどいません。最後に行なわれたのは、確か四年前だったはずですよ」

その時、視界の端にいたオリとアリスが、揃って眉を動かした。二人の目が一瞬、間に挟まれているヒースに向けられる。彼は先生の言葉に関心のなさそうな顔で二人の視線も受け流していたが、私は何故か背筋に悪寒がはしるのを感じた。

「では最後に、杖の登録を行ないます。皆さん、自分の杖か、もしくはそれに代わる魔法発射媒体を出してください」

リジー先生に言われて、ヒースを盗み見ていた私は慌てて杖を取り出すために、指輪に向かって強く念じる。大広間で服装が替わった際、魔法発射媒体も指輪の中に入っていた。

城の騎士団長が用意してくれた、レイピア型の魔法発射媒体が指輪から飛び出す。王宮付きの職人が直々に鍛えた物で、私の手に良く馴染む。一般的に、魔法発射媒体は杖型が好まれるが、核である宝石さえあれば、伝導体の形そのものはあまり重要ではない。もちろん伝導率に優れた構造であることが大前提であるが、それさえち

やんとしていれば、私にはこちらの方が向いていた。

「なるほど、武器タイプですか。上級者向けではありますが、経験は？」

「城の騎士と互角に渡り合える程度には」

その答えに、リジー先生は満足したように頷き、サクラの方を見る。サクラの杖は普通だった。木製三十センチ、手持ち部分の先に赤い宝石が埋め込まれている。

「ニコラス製の杖ですね。ルビースフィリアの宝石にした理由は？」
「え、えっと。瞬間放出が強いから、ブルーとかじゃ相性が悪いと思うって……」

「確かに。あの煙を吹き飛ばすほどの出力を出せるなら、持久力に優れたブルーよりもそちらの方が適していますね。正しい判断です。さて、次は——」

リジー先生はアリスとオリの杖を調べ（アリスは杖の他に魔導書を持っていたので、少し時間がかかったが）、最後にヒースの杖を確かめようとする。しかしそこで、先生の体が固まった。

「……ヒース・ハスナー。それは何ですか……？」

「魔法発射媒体の杖です」

「ええ確かに杖ですね。誰がどう見てもそれ以外の答えはないでしょう。どこで買ったのか非常に気になります」

「我が家に代々伝わる、由緒正しいガラクタから組上げました」

リジー先生は言葉を失い、頭痛を堪えるように頭に手をやる。私は先生に同情した。何せ、どう見ても普通の杖ではないのだから。

確かにそれは杖である。全体的に青く、澄んだ水のような色の杖。ただしサイズが桁違いで、手持ち部分も槍や混並に長い。先端には刃の代わりに巨大な拳大の宝石が取り付けられており、金色の板状のものがその宝石を囲むように並んでいる。まるで巨大な十字架のような印象である。

「…………ハスナー、いいですか？ それは魔法発射媒体として機能するとは思えません。宝石があったとしても、それだけでは魔法

使いの魔力を受け止める器にはなり得ない。一流の成績を納めた魔法使いでさえ、まともな杖を作るのには最低でも十年の修行が必要なのですよ？ そのことを理解しなければ――」

「はい。だから頑張つて作りました」

リジー先生は眉間を強く押さえる。どうやったら赤ん坊に言葉を伝えられるのだろうかと苦悩しているような、そんな顔だ。

「……分かりました。ならば、試しにファイアーを使ってみなさい。そうすれば、はつきりするでしょう」

リジー先生はそう言つと、何も邪魔な物が置いていない空間を指さす。直に使わせて、失敗作だと解らせるためだろう。本人は魔法の暴発で怪我をするかも知れないが、いい手である。ぜひ失敗してほしい。

少し躊躇うかと思つたが、ヒースはそんな素振りも見せずに、リジー先生の指さした方へ杖を向ける。アリスとオリが反射的に後ろへ下がつたので、私はおや？ と首を傾げた。が、すぐにその行動の意味を悟る。

「ファイアー」

呟かれた声は小さかつたが、その呪文に応えるように、杖の先から巨大な炎の塊が飛び出した。燃え盛る火炎は、まるで大きな薪をくべられたかのように周囲に熱をばらまき、一瞬で談話室を蒸し風呂へと変える。

「これでいいですか？」

そんな呑気な言葉と共に、炎は前触れもなく消える。と同時に、身体中にこびり付く熱が霧散した。全員が汗びっしょりだったが、一番炎の近くにいたはずのヒースは涼しげなままである。

「……………よろしい」

しばらく経つて、自分の杖で汗を消し飛ばしたりリジー先生が、困惑と共にそう告げた。絶対失敗すると確信していたのだろう。自作の杖など、まともに機能するはずがないからだ。だが、目の前で実証されれば文句も言えないらしく、そのまま後は歓迎会まで自由時

間だと皆に言つて、寮を出て行つてしまった。私も、今日何度目かも分からない驚きに、ただただ啞然となる。

「さて。じゃあ適当に、部屋の整理でもしようか」

「だな。早く済まさねえと夜になっちまうし」

「わたし、ヒースとい、一緒の部屋がいい……」

につこりと、まるで何事もなかったようにそう提案するヒースに反応できたのは、オリとアリスだけだった。

2・2「リーアの疑念」（後書き）

お待たせしました。リーア視点のお話です。ヒースのノリで書けなかったので時間がかかりました。

2・3「親友へのお詫び」

授業の開始は次の日からだった。

金曜日の朝。使い魔のメロンに起こされて身支度を整え、授業の準備をして部屋を出ると、既に談話室には三人の女性陣が揃っていた。

「おはようヒース……」

僕に気付いたアリスが、寝ぼけ眼を擦りながら挨拶してくる。

「おはようアリス。サクラとリーアも」

「おはようございます、ヒースさん」

「ふん」

花咲くような笑顔を見せるサクラと、対照的にそつぽを向くリーア。

「どうしたのリーア？ ずいぶんご機嫌斜めみたいけど」

「自分の胸に聞いてみる」

「うん？」

意味が分からず、僕は首を傾げる。

何かリーアを怒らせるようなことをしただろうか。記憶の糸を辿ってみるが、心当たりはない。寮に案内されて、杖の登録時にちょっと蒸し焼きにしかけたことを除けば、平和な一日だったはずだ。あとはせいぜい歓迎会で、リーアの取り皿にあった食べ物全てメロンに上げたり、お詫びに妹が栽培していた食人植物（名前はユグドラくん）をプレゼントしたり、それで激高したのを宥めるのにワインをボトルで飲ませて酔い潰れさせたくらいである。二日酔いにならないように、ちゃんと苦み抜群の丸薬も飲ませたし、まさかそのことを根に持っているわけではあるまい。被害で言えばオリの方が十倍は酷い。

「ヒースう……」

手近な席に腰掛けると、アリスがふらふらとこちらにやって来て、

首に抱きついてきた。どうやらまだ頭が覚めきつていないらしい。いつも眠そうな目が、さらにとろんとしていた。

「こうして毎朝と一緒にできるようになるなんて、夢みたい……」

「実際まだ半分は夢の中にいるみたいだけど大丈夫？」

「うん。邪魔なオリも小姑なユリちゃんもないし、さいこう……」

「どういう意味なのか気になるけど、あまり口に出さない方が良くと思うよ」

下手すると、地の果てからでもやって来ないとも限らない。

どうにも分からないのだが、何故か昔から、アリスとユリは仲が悪い。それはもう、僕が仲を取り持つのを諦めるほどに。

アリスがハスナー家の領地に一步踏み込むだけで、ユリは自分の使い魔を山ほど彼女にけしかけるし、アリスも周囲の被害など無視してそれらを焼き払おうとするのだから手に負えない。おかげでペルネートの屋敷から一番近い南の森は、現在は森とは呼べなくなっていました。

「そう言えばオリオンさん、まだ起きてきませんね」

ティーカップを置いたサクラが、僕の斜め後ろへ視線をやる。その先にはオリに割り当てられた部屋があった。

「疲れてるんじゃない？ 昨日あんな目に遭ったばかりだし」

「ああ……」

サクラの声が、憐憫の情に彩られる。その隣で、リーアが気まずそうに視線を逸らした。

昨日、歓迎会が開かれた晩。実家では滅多に出されない豪華な食事に舌鼓を打っていたオリは、突如リーアが放り投げた食人植物（ちなみに本人はわざとではないと主張）に頭から呑み込まれるという大惨事に見舞われた。先輩達の必死の救出もあってどうにか一命を取り留めたものの、結局彼はそのまま自室のベッドへ運ばれることとなった。

今思い出しても実に愉快——もとい、惨たらしい事件である。できれば今日はゆっくりと休ませてあげたいところだ。とはいえ授業

がある以上、それは難しいだろう。もつとも、その程度で親友へ詫びを諦めるほど薄情者ではないが。あの件における大半の責任はリアにあるが、僕も一枚の端くらいは嚙んでいるわけだし。

「ヒース……？ 面白い夢でも見たの？ すごく楽しそうな顔してるけど……」

「うん。まあ見るのはこの後になりそうだけど」

斜め向いでは、サクラが未だに心配げな顔をしていた。

「大丈夫でしょうかオリオンさん……」

「……まあ、昨日は気絶程度で済んでいたから心配ないだろう。一応聞くがヒース、オリの目覚まし鳥にはちゃんと起こすよう言っているんだろっな？」

「もちろんさ」

昼頃に。

「……分かった。そもそも昨日の件に関しては、私にも責任がある。もしこのまま起きてこないようなら、彼はそのままゆっくりと寝かせておくでしょう。先生には私から説明する」

さすがお姫様。器量よしというか、この歳にして責任の取り方をきちんと分かっている。

「あとはこれで、性格が可愛かったら言うこと無しなんだけど……」

「何か言ったか？」

「性格が可愛かったらなあって」

「少しは包み隠すということをしたらどうだ！」

きつ、と向けられる眼光を適当に受け流して、僕はこんがり焼けたトーストをかじった。

カルネティアの授業は、午前と午後に二科目ずつ行なわれる。最初の授業は『総合魔法学』だった。

メロンと別れた僕らが一階にある教室に入ると、既にそこには二十人以上の同級生がいた。昨日リジー先生が言っていたことだが、

AクラスとBクラスは他と比べて極端に人数が少ないため、通常の授業はCクラスの上位成績者も含めて合同で行なうのだそうだ。

「リーア様！」

教室にリーアが足を踏み入れた途端、大勢の男女が彼女の周りに群がった。

「お久しぶりでございます、リーア様。オールド子爵家のマリーです。覚えていらっしゃいますか？」

「ああ、ミス・オールドか。確か去年の舞踏会以来だったかな」

「ええ。こうして同じ学舎で再び会うことができるなんて、夢のようですわ」

マリーが下がると、次々と他の生徒がリーアの前へと進み出る。

同じような文面の挨拶が延々と続くが、リーアは嫌な顔一つせずそれらに應じる。内心はどうか知らないが。

「わあ……すごい人気ですね、リーア様」

「まあ、一応お姫様だしね。今の内に仲良くなっておこうって魂胆なんじゃないかな」

そう言えば、リーアがカルネティアに入学したことはもう貴族達の間で広まっているのだろうか。だとしたら、既に母の耳にも入っていることだろう。婿候補になれるように死ぬほど勉強しろと言われてきたが、この分だと近いうちに作戦変更のお達しが来るかもしれない。

「うーん……屈服させるとか、弱みを握れとかかなあ……拉致しろっていう可能性もあるけど——」

いずれも得意分野だが、できれば実行したくない。いちいちオリに濡れ衣を着せるのだから一苦労なのだから。

「あ、あの、ヒースさん？ 何だかなり物騒な単語が聞こえたよな……」

「気のせい気のせい。さ、先生が来る前に、どこか皆で座れる場所を見つけようか。アリス、良いところある？」

「ちようどあそこが丸々空いてる……」

アリスが一番前の席を指さす。六人は余裕で座れそうだ。

「じゃあそこにしよう。早くしないと――」

「おい、お前」

突然、背中越しに声をかけられる。振り返ってみると、見覚えのない金髪の少年が腕を組みながら、こちらを睨んでいた。

「……誰？」

こんな知り合いだろうか。そう思って訊ねてみると、相手は視線をさらに険しくする。

「……ほう、このマイルズ・ラ・スフィンフォードの顔を忘れるとはいい度胸だな」

僕はますます混乱する。スフィンフォードと言えば、確かアルケ―王国でも指折りの富豪として名を馳せる名家である。そんなところに知り合いがいたら間違いない記憶に残るはずだ。こんな、いかにも金のかかる木――ではなく金髪のボンボン、顔を合わせていれば適当に全財産を――

「ああ！ 昨日ちよっかい出してきた金髪のボンボン！」

「誰が金髪のボンボンだ！」

思わずボンと手を叩いた僕に、マイルズが眉をつり上げて詰め寄ってくる。

間近で見えて確信する。どうやら間違いないようだ。

「昨日はよくもやってくれたな！ お前のせいで僕は一日中病棟で過ごすはめになったんだぞ。ジユメル先生には憐れみに満ちた目で制服を手渡されるし、彼女には自業自得だと呆れられるし――」

「誰が彼女よ」

「が――っ」

いつの間に近づいてきたのか。赤銅の髪をサイドアップにした活発そうな少女が、マイルズの頭を容赦なく教科書の角で叩いた。数千ページを誇るドラゴンの革張り本の一撃を受けた彼は、硬い大理石の上に突っ伏して動かなくなった。

「ごめんね、ハスナー君。いところが迷惑かけちゃったみたいで。私、

シルドメディア・テストロッサ。呼びにくかったらシアでいいよ」
シルドメディアと名乗った少女は、謝るように顔の前で両手のひらを合わせる。

「いや、こちらこそありがとうシア。正直戸惑ったけど、別に気にしてないから」

「そう言ってもらえると助かるよ。こいつには後でちゃんと聞いて聞かせとくから。じゃあまたね」

シルドメディアはマイルズの襟首を適当に掴むと、引きずるようにして教室の後ろに去っていった。

「……」

「どうしたの、ヒース？ 何だか難しい顔してるよ……？」

「いや……豚に真珠って言うけど、真珠の価値を解ってる豚ってどうなのかなって思ってた……」

僕の呟きに、アリスはきょとんと首を傾げる。その時教室の扉が開き、リジー先生が入ってきた。

リーアを囲んでいた生徒達が、まるでクモの子を散らすように自分達の席に戻っていく。やっと皆から解放されたリーアも慌てて座ろうとするものの、生憎どこも満席であつた。ざっと一瞥してそれを認めた彼女は、仕方ないと言いたげな顔で、唯一空いていた僕の隣へ来る。

「や、お務めご苦労さま」

小声で労いの言葉をかけると、リーアは心底気が滅入った顔で僕を睨む。相当辟易しているようだ。

「……嫌みのつもりか」

八つ当たり気味な言葉に、僕は苦笑を抑えつつ肩を竦める。

「普通に気遣っただけだよ。嫌みだなんて、僕がそんな意地の悪い人間に見える？」

「見える」

「……まさか出会ってたった二日で、そこまで迷いなく断言されるとは思わなかったけど。さすがに杞憂だよ」

「どうだか。貴様が言うと、何か裏がありそうな気がするぞ」

「考えすぎだつて。そんなだと、いつか人間不信になっちゃうよ？」

「む……」

そう指摘すると思うことがあったのか、リーアは少し眉をひそめて口を閉ざした。ちょうどリジー先生が教壇に上がったので、そこで話は終わる。

「こんにちは皆さん。さて、さっそく授業の説明ですが、最初の一つ言っておきます。『総合魔法学』は、カルネティアで学ぶ全ての魔法を高度に組み合わせ、技能として習得することを目的とした科目です。当然、授業はとても難しいものとなります。二年での中期評価試験、そして五年においての後期評価試験では、ここにいる生徒の半数は落第しているはずです。ですから真剣に取り組む意志のない者は、今すぐに出て行くことをお勧めします。分かりましたね？」

厳しさを秘めた鋭い眼光が、着席した生徒全員をぐるりと一瞥する。ぴん、と糸を張ったような緊張感が教室を満たし、何人かが唾を呑む。

「……では、まずは授業の概要から始めましょう——とりたいところですが、その四人。オリオン・クロム・アスティンはどうしたのですか？ 見たところ姿がないようですが」

「……彼は少し事情があつて、今は寮の自室にいます」

リーアが簡潔に答える。

「事情？ それは最初の授業を休むほどのものなのですか？」

「はい。実は——いえ……」

リーアは説明しようとするが、まさか自分のせいで美食家の植物に喰われかけ爆睡していますなどと言うわけにもいくまい。たまたまナイフを投げたら刺さりましたと言つてるようなものだ。彼女は言葉を詰まらせ、ちらりと恨みがましい視線をこちらに向ける。

元はと言えば貴様のせいだ——綺麗な金色の瞳がそう告げていた。なんて理不尽なのだろう。

（仕方ないなあ……）

僕は小さく嘆息し、助け船を出すことにする。

「あの、リジー先生。これにはとても深い理由があるんです」

「どういうことですか、ハスナー？」

「実はオリは……昨日の歓迎会で、泥酔したとある同性に、初めて唇を奪われて寝込んでるんです……」

ガタンと大きな音がして、リーアが椅子から転げ落ちた。

「——おい貴様……っ！」

机の下から制服の襟首を掴んで無理矢理僕の頭を下に引き寄せ、リーアが声を絞りながら怒気を散らす。

「どうしたの？ 何も嘘は言ってないけど」

「黙れ白々しい！ 何故わざわざそんな誤解を招くようなことを！？」

「誤解つて、例えば？」

「例えばつて、その、だな——っ、……」

問い返すと、リーアは微かに頬を染めて言葉を詰まらせる。

何も言えなくなってしまうたらしいので机の上に顔を戻すと、リジー先生は愕然とした表情になっていた。

「……それは……それは本当なのですか、ハスナー……？」

「はい……」

震える声でそう訊ねるリジー先生に、僕は沈痛な面持ちで頷く。

「まさに地獄絵図のような光景でした……オリも必死に抵抗したんですけど相手は離してくれず、どころか全身に絡みついてゆつくりと貪るように……何とか皆で引き剥がしましたが、その時にはもう彼は……っ」

「まさかそんな……貴女達、彼の話に間違いは……？」

リジー先生は信じられないという顔で、最後の希望に縋るようにリーア達の方を見る。

「はい、本当ですけど……？」

サクラがきよとした顔で頷く。

「寸分の狂いもない事実です……」

忠実な部下のような態度でアリスも認める。

「……確かに、間違っではいませんが……っ」

最後に、凄まじい葛藤を思わせる沈黙を挟んでリーアが大きく肩を落としたのを見て、リジー先生はシヨックのあまり壇上の方によるけた。

「——っ、遅くなりました——！」

その時、まるで蹴破るような勢いで教室の扉が開かれ、ぐしゃぐしゃの格好をしたオリが教室に飛び込んできた。

「す——すみま、せん——寝過ぎしました……」

教室に満ちる奇妙な空気にも気付かず、オリは肩で大きく息をしながら、噴き出る汗を拭う。

一斉に教室中の視線が彼に集中し、次に壇上に体を預けたままのリジー先生へと注がれる。リジー先生はまだシヨックから立ち直っていないようで、壇上に身を預けたまま固まっている。

「あ、あの……リジー先生……？」

てつきり怒られると思っていたらしいオリは、何も言ってこない先生の態度に逆に不安を覚えたのか、おずおずと声をかけて様子を窺おうとする。

「オリ……」

リーアが立ち上がり、オリの両肩を掴んで顔を埋める。

「なっ！？ りりり、リーア様！？ いきなりどうし——」

「すまない……あの悪魔を止められなかった私を許してくれ……っ」

いきなり密着されて狼狽するオリを無視して、リーアはまるで懺悔の念に打ちひしがれた罪人のように力なく頭を垂れる。

ちなみに？あの悪魔？とはユグドラくんのことだろう。間違いない。

「——アステイン。話は伺いました。体調の方はもう良いのですか？」

不意にリジー先生が、いつもの厳格さなど欠片もないほど優しく

な声で訊ねる。オリはもう何が何だか判らないと言いたげな顔になるが、それでも律儀に頷いた。

「ああ……はい。正直まだあちこち辛いですけど、この程度どうってことありません。弱音を吐いて学期最初の授業を休むわけには——って、リジー先生！？ どうしていきなり口を手で覆って顔を逸らすんですか!？」

オリの健気（に聞こえる）な言葉に、リジー先生は込み上げてくるものを抑えられなくなったようだった。小さな嗚咽を漏らし、微かに鼻をすする。リーアが絶望的な目をした。

「あの、先生……」

「分かっています。アルケー殿下」

全然分かっていない。

本当はそう突っ込みたかったのだろう。しかし止められた以上何も言えず、リーアはそのまま悔しそうに口を嚙む。

「皆さん、少し早いですが今日の授業はここまでです。次からは本格的に取り組みますので、心しておくように。アスティン、ちょっと話があります」

予期せぬ終了のお達しに全員が色々な意味で興奮して教室を出て行く中、リジー先生がオリを引き留める。

「あの……何でしょうか……?」

いよいよ怒られるのかと身構えるオリに、リジー先生は真剣な顔で向き合う。

「アスティン、もし何か困ったことがあったら、いつでも私に相談なさい。Aクラスの担任として、できる限り力になります。必要なら、カルネティアーのカウンセラーの先生も紹介しましょう。ですからくれぐれも、問題を一人で抱え込んだりしないように。約束ですよ」

「へ……?」

言うだけ言って教室を去っていくリジー先生。後にはAクラスの面々だけが残った。

「……おい、いったい何があつたんだ……？」

半ば啞然とした顔で僕に訊ねるオリ。

「きつと、君の心の強さに感動したんだよ」

昨日酷い目に遭った無二の親友に、僕は思ったままのことを伝えた。

「無垢な頃の回想？」

「——それで？ 最近悪さをしている、有力貴族の我がまま娘だっけ。そいつを懲らしめれば良いんだよね？」

普段は滅多に通ることのない、南の森の獣道をユリと一緒に抜けながら、僕は前を歩くオリオンに訊いた。

「ああ……近所で苛めばかりしてる、本当にどうしようもない奴だけど勝てなくてさ。母さんに相談したら、むかし死闘をくりひろげた友人が魔法使いと結婚したはずだから、あの山に行けばその子供が助けになってくれるかもって教えてくれたんだ」

まさか本当にいるとは思わなかったと、オリオンは複雑な顔になる。

僕は肩を竦めた。

「まあねえ。父上はもう何年も牢獄だし、母上も色々忙しいからね。おかげで僕らも、ほとんどあそこからは出たことないし」

そのせいで、最近は二人とも退屈を持て余していた。山中に猿神用のトラップを張り巡らせるのにも飽きてきたところだったので、彼がその内の一つに当たってあそこに流れ着いたのは、僕らにとっても渡りに船であった。

森を抜けてしばらく歩くと、丘の向こうに我が家の百倍は大きな屋敷が見えてきた。

「なあ……魔法資質が開花してるだけでも心強いんだけど、本当にオレたちだけでいいのか？」

「まあ大丈夫なんじゃないかな。いざとなれば罔もいるし」

「おとり？」

知らぬが仏なので黙っておく。

「おにいちゃん。こらしめるって、どうやるの？」

「うーん、そうだね。ユリは何か考えてる？」

「えっとねえっとね。身ぐるみはいだあとनावでしばって質屋に売

りとばすなんてどう？」

「ちよつと待て！　いくらなんでもダメだろそれ！？」

「そつだよリ」

妹の提案に、オリオンが素つ頓狂な声で待ったをかけた。僕もそれに同調する。

「そこらの質屋じゃ実入れも少ないし、足が付いちやうよ。相手は名のある貴族の一人娘なんだから、ここは捕まえた後身代金を要求して、がっばりと稼いでからテロス帝国に流すくらいはしないと」

「さすがおにいちゃん！　それでいこうよ！」

「……」

オリは、何故か理解しがたいものを目の当たりにしたような顔になって絶句した。

「――あら？　誰が来たかと思えば、貧乏貴族のオリじゃない」

屋敷の方から声がしたので顔を上げると、窓の一つが開け放たれ、同年くらいの子が純白の優雅なドレスを身にまとい、こちらを見下ろしているのが見えた。

輝く銀色の髪に、宝石のように紅い瞳を持った勝ち気そうな顔をした少女は、口元に傲慢な笑みを浮かべる。

「また性懲りもなく苛められにきたの？」

「うつせー、アリス・リ・ペルネート！　今度はこっちにだって魔法を使える奴がいるんだから覚悟しろ！」

もしかしなくても僕らのことだろう。しかしこれだけの財力を誇る貴族を相手にまるで物怖じしないとは、大した度胸の持ち主である。単に何も考えてないだけかもしれないが。

「へえー。もしかして、その隣にいる変な眼鏡をした男の子のこと？　あんたと一緒に、いかにも田舎くさそうじゃない。お似合いねぶちんツ！！　と、隣から血管に換算して十本くらいが一度に切れた音がしたのは一先ず置いておくとして。

今思つても、僕らとアリスの逢いは、文字通り最悪の一言に尽きた。

3・1「秋の風物詩」

一月も経つと、戸惑うことの多かったカルネティアの生活にも慣れてきた。単純なようで実は複雑な学校の内部構造も全て覚え、授業の方も問題なくついて行けている——少なくとも、僕とリーアは。

『神学』はフレリアル教の歴史を教えるための科目だ。シンエン・リー先生は、かつてリーアの教育係も務めたほど有能な教師らしい。歴史については特に深い知識を持っており、最初の授業でいっそ清々しいほど歪められたアーカーシャの英雄譚を語ってくれた。

『魔法理論学』のジューメル・アインシュ先生はBクラスの担任であつたが、Bクラスだけをひいきすることはなかった。逆に少しでもそれを期待すると、途端に極寒のような眼差しが返ってくるため、Bクラスの生徒達は生真面目に授業を受けていた。

『魔法呪文学』を教えるシュバリエ・ナカータは、はっきり言って正体がまるで読めなかった。明らかに獣人か、少なくともそれに近い種族だと思うのだが、フードの中を見た者は誰もいないらしい。しかし魔法の力を見張るほど卓越していて、特に呪術系では、杖も使わずに悪霊をオリに取り憑かせるといふ離れ業をやつてのけた。

『実戦魔法学』担当のダフネ・ランページ先生は、想像とはかけ離れた人物だつた。『紅蓮の氷華』とまで表されるほどの戦騎なのだから、どんな人物かと思いきや、実際の印象は『とても面倒見の良い、ちよつとだけ頭の悪いお姉さん』だつた。もともと、槍を手に持った瞬間に放たれた、刹那の殺気を別にすればの話であるが。

秋の季節の二月目に入ると気候も穏やかになり、寝起きがずいぶん楽しくなった。眼下の森には鮮やかな黄や朱が混じり、いっそう深みのある彩りが島全体を夕焼けのように包み込む。食べ物も一段

と美味しくなり、食卓に並べられる日替わりサラダが密かな楽しみとなった。メロンも嬉しそうに「にやにやあ！」と皿に盛られた牛肉の姿焼きに舌鼓を打つ毎日である。

「本当、秋の食べ物美味しいよね」

「貴様だけ冬を満喫しているように見えるのは気のせいかな？」

テーブルの真ん中でぐつぐつと煮える大きな鍋を見て、リーアが訝しげに眉をひそめる。

時刻は夕刻。今週最後の授業を終え、出された宿題を全て片づけた末にやっと得られた、心休まるささやかな一時である。

この頃になると、最初は同じだった皆の制服にも個人差が出てきた。例えばテーブルを挟んで立つリーアだが、彼女のはより動きやすいように所々手が加えられた、実用性重視の服装になっている。サクラを初めとした自己主張が控えめな一部の学生はそのままだったが、オリはズボンにベルトを取り付けていたし、僕も袖の先に白のラインを追加していた。中には原型が分からないほどの改造を施した学生もあり、今まさに隣のアリスが着ている、フリルやレースで覆われたドレスと見紛うそれなどが主な代表である。

まあ、それはさておき。

「せっかくAクラス特権で頼んだ食材が届いたんだから、使わない手はないよ。山のような宿題も終わったわけだし」

「お前らだけじゃねえか」

対面で、未だ宿題の山に埋もれたままのオリが、どんよりと景気の悪い視線をこちらに向ける。入学時と比べるとすっかりやつれ、目元には大きな隈ができていた。こんな彼を見るのは、悪鬼の巣窟に手違いで放り込んだとき以来だ。二日経っても帰ってこないの仕方なく助けに行ったときも、同じ顔をして倒れていた。

オリの言うとおり、宿題を片付けたのは僕とリーアの二人だけで、その他の三人は今もレポートの作成に没頭している。鍋ができあがるのはまだしばらく先なので（ちなみにちゃんと全員分ある）、僕らは三人の宿題を手伝っていた。僕が面倒を見ているのはアリスと

サクラの二人。オリはリーアの担当だ。最初オリは僕に手伝ってほしいと懇願したのだが――何せ、お姫様が相手だと精神的に色々気を遣うはめになる――それは蹴っておいた。アリスやサクラを手伝う方が格段に楽しいし、何より男の面倒を見るなど家訓が許さない我が父上の生家であるはずのハスナー家には、何故か男性に対して極限の試練を架す掟が数多くあるのだ。

「あの、ヒースさん。これはどう答えればいいんでしょう？」

「ん、どれ？」

サクラに訊ねられ、僕は隣からプリントを覗き込む。内容は『魔法発動の原理およびその概念を説明せよ』というものだった。

「魔法って、術式を暗記して呪文を唱えるだけで発動するものですよね？　なのに、急に概念なんて言われても……」

「大丈夫、ちゃんと解るように説明してあげるから」

話している内に泣きそうな顔になるサクラに、僕は苦笑を返しながら慰める。

入学試験のときにも思ったことだが、この学校における魔法の水準は、本当にえげつないほど高い。今までほぼ独学で魔法を習ってきた子供に――親や家庭教師に教わった者もいるだろうが――何段階もすつ飛ばした知識を叩き込んでいるのだ。はつきり言って異常である。

ちなみに上級生の姿はここにはなかった。皆宿題の難解さに頭から煙を噴き出し、下の図書館に出払っている。

「えーとね。そもそも魔法っていうのは、体の中に宿る魔力を正しい順序で加工して、特定の事象を引き起こす力なんだ。魔力は僕たちの頭の中に浮かんている術式に組み込まれて最適化され、杖を通路に魔法として顕われる。呪文を唱えるのは、言葉を引き金に、脳から術式を引っ張り出すためなんだよ。だから極論で言えば、『フアイアー』を唱えて水を放つことだってできる。まあ、呪文の力は意志の強さに左右されるから、そんなややこしい事はやらない方がいいんだけど。やっぱり火は火、土は土って唱えるのが一番かな」

モチベーションを保てるよう、興味を惹かれそうな話を織り交ぜつつ、問題解決に繋がる基礎的な部分を丁寧に説明する。

「——あと、複雑な大魔法なんかは複数の呪文を重ねることで記憶している術式を次々と組み合わせ、さらに演算術式で効果と精度を高めるわけだけど、そっちはまだ気にしなくていい。じゃあここまでで何か質問は——って、サクラ？」

「一〇分ほどを費やしてそう訊ねてみると、サクラは口を半開きにして、放心したようにこちらを見つめていた。

その顔が、ハッと我に返る。

「す、凄いですヒースさん！ あたし、今まで授業の内容とかチンプンカンプンだったのに、ヒースさんの話を聞いてたら、いきなり解っちゃいました！」

そう言って、大はしゃぎして尊敬の眼差しを向けるサクラ。僕は「そんな大したことじゃないよ」と謙遜する。

実際のところ、サクラの頭は悪い方ではないだろう。むしろ、とても良い方だと思う。普通あの程度の説明では、授業の内容にまで物事を結びつけることなんてできない。基礎となる知識をちゃんと学べれば、ここににいる誰よりも伸びる可能性があった。

その点でAクラスは、非常に恵まれた環境と言えるだろう。寮の下にある図書館には必要な蔵書が一通り揃っている上、二四時間いつでも自由に利用できるのだから。BクラスとCクラスは隣の塔からこちらまで移動する必要があるし、利用できる時間も限られている。Dクラスに至っては考えるまでもない。行きと帰りだけでも生き地獄だ。

「オリ、あともう少しだ」

「——んなこと言われても……っ、もう限界……です……」

ちょうどサクラの宿題が佳境を迎えた頃、向い側でとうとう緊張と疲労が限界に達したらしいオリが、根を上げてテーブルに突っ伏した。半分も片付いていない山が崩れ、テーブルの上に広がる。

「中々苦戦してるみたいだね」

声をかけると、リーアは苦々しい顔になって体を背けた。

「……元々教えるのは苦手分野だからな……貴様のように、そつちの才能に恵まれているわけでないことは重々自覚している」

己の身分に対する自覚はないのだろうか。

それはともかくとして。

相変わらず棘のある声だったが、そこには出会って間もない頃の、刺すような気迫はなかった。憎々しげな視線は相変わらずだが、今はその端々に、半透明な罪悪感らしきものが混ざっている。

（やっぱり気にしてるのかな……？）

つい二週間前、リーアは学年代表に選ばれた。半月の学業成績から、リジー先生が彼女を一年の代表にすることを決定したのだ。教師も生徒も不満を示さず、大いに喜び、彼女は学校の誇りだと祝福の言葉を述べた。

しかし当の本人は、この決定に喜ぶどころか、誰も予想だにしなかったほど強く反発した。

どうして自分が学生代表なのかと怒りも露わに、副校長室に乗り込んで抗議したという。

リーアの成績は悪い方ではない。というか、一年生の中ではトップクラスである。他の生徒が黒板の内容を理解するだけでも苦労しているという現状で、彼女は座学のテストで全教科満点という、とんでもない結果を叩き出していた。学年代表に選ばれても、何の不思議もない。

だがいくらリジー先生がそう説明しても、リーアは納得しなかった。

座学のテストだけで見ると、彼女は確かに学年一位である。二位が総合で五点の差を付けられ僕。三位は大きく離されてアリス、次にサクラという順だ。

ここまではいい。問題は実技の方。

実技は僕がダントツの一位という結果であった。リーアは二位で、しかも一位から総合二〇点以上という絶望的な差を付けられ敗北（

紙の上とは違つて結果の上限がない実技では、総合でこれだけの差がつくことは間々ある）。ちなみに三位はオリで、次がサクラだった。

カルネティアは魔法の実践的運用に重きを置く学校だ。これらの成績を加味すれば、僕が学年代表に選ばれた方が自然であるという。アは考えているようだった。事実成績が発表されたとき、彼女は学年代表の座を逃したことを確信したという。

それなのに蓋を開けてみると、自分が学年代表。王女という身分に遠慮して、先生がえこひいきしたと思つても無理はない。実際、その推測は当たっているだろう。

結局、リジー先生にあれこれを理屈を述べ立てられている内に無理矢理丸め込まれてしまったようだが、以来どうにも僕に対して負い目を抱いているらしく、必要以上に突つかかってくることはなくなった。

別に気にしなくていいのと思う。少なくとも、僕はこういう結果になることは判つていたわけだし。

いくらカルネティアが実力主義で、本人が平等であることを望んでも、それで皆が王女リーアではなく、リーア自身を見るようになるわけじゃない。そんな簡単なことが、頑なな彼女には解らない。いや、もしかしたら解った上で、認めたくないのかもしれない。本当に解つていないのなら、僕を学年代表の座から蹴り落としたことをもつと喜ぶはずなのだから。そうしないということが、今の彼女の心情をよく表わしている。担当が別々とは言え、二人で友達の勉強を手伝うなど、少し前なら考えられなかった。

もつともそれで、僕に抱く敵対心が消えたわけではないことも承知していたが。多少迷いが生じているようだが、彼女の僕に対する態度は相変わらずだった。今は火種がくすぶっている状態だ。あえて爆発させてみるのも一興かもしれない。

「……ん、気のせいかな——？　今一瞬寒気が過ぎつたような……」
「風邪でもひいたんじゃない？　オリも気をつけた方がいいよ。今

にも死にそんな顔してるわけだし」

さすがに自身の危機に対する直感は並外れて高いようだ。素知らぬ態度で適当に流しながら、僕はオリに話を振る。

オリは呻き声で応えた。

「……実際、もう半分は死んでるような気分だけだな……まだ三教科分しか終わってねえし。ただでさえ、ここ一週間はめちゃくちゃ忙しかったってのにさ……誰だよ、オレが男に愛を囁かれたなんて噂流したの……」

「まったくだよな」

本当にとんでもない誤解である。噂の出所は未だ判然としないが、困った輩もいたものだ。サクラなど、半ば本気で信じてしまっていたし。

あまりに可哀想なので、僕は特別に慈悲をくれてやることにした。「オリ。何だったら疲れに効く薬草があるけど、いる？」

「ホントか？ 悪い、恩にき——」

「トリカブト、ベラドンナ、ジギタリス。どれがいい？」

「全部毒物じゃねえか！ お前、宿題より先にオレを殺す気か！？」

「まあまあ、騙されたと思って。毒は全部抜いてあるし——多分」

「多分ってなんだ多分って！？ そんなので騙されてたまるか！」

「楽になるのに」

「絶対別の意味だよなあ！？」

結局そんな話をしている内に時間が過ぎ、オリの宿題は明日へ持ち越しとなった。

3・1「秋の風物詩」(後書き)

お待たせしました。三章開始です。

3・2「嵐の前触れ」

嵐は見えないところで起きている。

きつかけはせいぜい、水面を揺らす程度の小さな一颯。

小さな乱れに過ぎないそれは、様々な思惑や思想を吸収し複雑に絡み合い、厄介な面倒事となって頭上へと降りかかってくる。

例えばここ最近の出来事では、次兄の戦死が挙げられるだろう。

長兄がテロス帝国の策略に嵌り死んでからわずか二年、今からたった半年前に起きた事である。

悲しまなかったと言えば嘘になる。しかし、私の心はどこか冷めきっていた。両方とも、元々あまり親しくなかったというのも理由の一つだが、それだけではない。

王族の死は、決して珍しいことではないのだ。一昔前の内乱や権力争いを例に出してみるまでもなく、責任ある立場に死の危険は付きものだ。王族である私にとって（そして多分、長兄や次兄にとっても）、身内の死は悼むものではあっても、嘆くものではない。

必要なのは、死んでいった者達から学び、二の舞にならないこと。週末の談話室。

昨夜山のような宿題があった反動からか、いつもの時間にも関わらず、広い空間は閑散としていた。

神話時代からの名残らしく、一週間の内、今日と明日の学業は休みである。王宮のように豪奢でも煌びやかでもなく、ただ清潔さだけを追求した印象を受ける談話室にいたのは、テーブルに突っ伏してイビキをかいているオリだけだった。

察するに、夜通しで宿題を片付けたのだろう。ぐっすりと眠るオリに毛布を被せ、いつものように朝食を済ませた私は、無意識に左腰にある鞆の感触を確かめながら新聞を開く。ざっと紙面に目を通しながら、思考はまったく別の——とはいえ無関係ではない——方向に埋没していく。

——次兄が戦死することになった最大の原因は判っていた。テロス帝国の保有する魔動機兵だ。

ロスト・アルケミスト。一般に古代文明の遺産として知られる、神秘の結晶。その内の一つ、スフィリア石に込められた魔力を動力源に破壊の限りを尽くす、銀色の機械人形。

つい最近、テロス帝国は、その一つである魔動騎兵の解析および複製に成功した。

最初聞いたときは、はっきり言って信じられなかった。

それまで現存する魔動騎兵はたったの二体。テロス帝国は元々魔法工学が発達していることで知られているが、同系統の分野とはいえ、まるで次元の違う技術の塊であるロスト・アルケミストを現実複製できるとは思っていなかった。あれらはその名の通り、一度失われた文明の遺産である。

しかし現実には、魔動騎兵は複製された。

神話でその力を大いに振るったとされる白銀の虐殺魔。それが六体も現れたことで（正確な経緯は生き残った騎士から聞いたものだ）前線は瓦解。我先にと逃げる兵士の波に半ば巻き込まれるような形で、次兄は非業の死を遂げた。しかも、アルケーに代々伝わる最上級の古代文明の遺産——ロスト・レリックの一つまで失うという大失態。

あちらがこの事に気付いているかは判らないが、少なくともそれを把握している王家と諸侯は、現在半狂乱の状態にある。もったもだからこそ、その混乱の隙を突いてコレを回収し、この学校に入学するという非常識な芸当ができたわけであるのだが。

国の一大事にとんでもないことをしかしているという自覚はある。が、これはリーア・アルケーにとって、至極当然の判断だった。嵐は見えないところで起きている。

この国は今、目に見えない巨大な厄災に喰われつつある。

それはまだ薄い膜のようなものであるが、そう遠くない未来にかつてないほどの危機が訪れると、私は肌で感じ取っていた。

誰もそれを気にしない。気付かない。

自分と同世代の貴族は、ある意味仕方ないのかもしれない。しかし先達であるはずの大人の貴族達まで同じように見えるのは、我慢ならなかった。

故にこそ、独断専行である。

——とはいえ。

私にできることがそう多くないこともまた事実だった。

こんな時期だからこそと、カルネティアに行くために周りの大人を説得し、身の整理を終えるまでは眠る暇らないほど忙しい日々が続いていたが、一度入学してしまえば、後はやることが何もなくった。せいぜい、世界の情勢に毎日目を通してながら、学業に励むくらいである。

思わぬ天敵が潜んでいたことが、唯一の誤算だったが。もともとアレは学校生活の面ではともかく、国の危機に対して直接の害があるわけではないし（少なくとも今のところは）、いろんな意味で目の上のたんこぶであることを除けば、気を取られるような問題ではない——頭でそう分かっているにも関わらず、感情を制御できないのは自分の未熟さ故か、それとも相手の才覚か。

どちらを認める気にもなれず、私はつい慥然と顔をしかめながら新聞をめくる。

すると、ある記事が目にとまった。

『死玉の盗賊団、アステインの領地で謎の壊滅』

「……」

何度もタイトルを頭の中で読み返し、続いて真正面で寝息を立てている少年へまじまじと視線を向け、また戻す。

記事には、こう書かれていた。

『二日前の未明、アステイン領の村を死玉の盗賊団が襲った。

死玉の盗賊団とは、国内で最大の規模を誇る盗賊団であり、その勢力は、下流貴族の軍に匹敵すると言われている。

首領はかつて貴族であり、自らの領地を焼いた大罪人、オロス・ミディナル。

死玉の盗賊団は盗賊らしからぬ統制された動きと、貴族の死角を突く略奪を繰り返すことで有名で、その被害総額は年間七百万ユドルと言われている。今回、アステイン領で金品を略奪しようとしたのは、ペルネート領を襲うついでであつたと推測される。

その盗賊団が、夜明けを待たずして壊滅した。

助けに駆けつけたペルネート兵団の話によると、アステイン領の村に辿り着いたときには既に、盗賊団は全滅していたらしい。

「まったく分かん」

一体何が起こつたのか。

現場でそう質問する記者に、ペルネート兵団の第三隊長は、そう言つて首を傾げた。

「私もこの仕事に就いて長いが、こんなことは初めてだ。あちこちで暴れた形跡はあるというのに、肝心の野盗共は一網打尽でそこら辺の地面に転がっていてね。誰かがやつつけたのだと思うが、それにしても奇妙なことに、金品の一部が消えているんだよ。連中のアジトにも行つたがね、そこも金目の物が根こそぎ奪われた後だつた——」

捕まえた野盗達に尋問したところ、彼らを襲つた者の証言はバラバラだつたそうだ。

『鎧をまとつた猿の集団が鉄球を振り回して——』

『白熊が……白熊が刀を抜いて襲いかかつてきやがつたんだ！』

『あり得ん——あの針ネズミ、自分の針に毒を塗つて俺達を殺そうと……っ！』

中には『デスサイズ……っ』と苦悶の声を上げた者もいたらしいが、詳しいことは定かではない。

なお、避難していた村人達は、これらの話に何故か額から汗を流

して黙り込んだ。

『——とうとう我慢の限界に達したか……』

『ここ最近はそれなりに大人しかったんじゃないか？……』

『いや……一月保っただけでも奇蹟じゃないか？ 金は諦めよう……』

微かにそんな話し声が聞こえたものの、記者が耳を傾けていることに気付くと、彼らは一様に口を閉ざしてしまい、それ以上の質問を拒んだ。

今回の件で死玉の盗賊団が壊滅したことは喜ばしいが、同時に必ずこの不可解な事件の真相を突き止めると、ペルネート兵団団長は記者に約束した』

「……」

記事を読み終わってもしばらくの間、私は開いた口が塞がらず呆然と紙面の文字を凝視していた。一応頭の中で確認しておくが、これはゴシップやありもしない物を取り扱うような三流雑誌ではない。国内の情勢や事件、それに外国の動きなどを国民に伝えるための由緒ある情報媒体である。

なので、書かれている内容はともかく、情報の精度は確かなはずなのだが——それでも私は、これが質の悪い悪戯ではないかという疑問を拭いきれずにいた。

国内最大の不穏分子が、たかが猿や熊や鼠ごときに返り討ちにあったというのだから、当たり前かもしれないが。証言の奇妙さにはかり目が行きやすいが、捉えようによつては面子（主に今まで手も足も出なかった貴族達の）に関わる問題である。

「……………オリ、起きてくれ」

決して短いとは言えない黙考の末、私はテーブルを挟んで気持ちよく眠っているオリの方へ身を乗り出し、軽く肩を揺すった。

反応はすぐあり、開け放たれた窓から差し込む心地良い日差しに顔をしかめ、オリは目をこする。

「——ん……？　なんだ、もう朝かよ……ヒース、頼むから後二ふ——」

そして、光に慣れていない目が、私の姿を確認して固まった。

「ひ、ひひひひひ姫さん——じゃなくてリーアさま!？」

「……君はあいつの前で、私のことをそう呼んでいたのか」

王女に対するものとしてはかなりフランクな呼称に、私は呆れのあまり半眼になる。

寝言の後半は聞かなかったことにする。

「すまないな、気持ちよく寝ていたところを起こしたりして」

「い、いえいえいえ！　そんなことは——」

「それと、何度も言うようだが、私のことは普通にリーアと呼んでくるとありがたい」

「う……」

オリが居心地悪そうに縮こまる。我ながら意地の悪い言葉だと思わないでもなかったが、半分以上は本気である。

何せ入学してからもう一月以上経つというのに、未だにそう呼んでくれる相手と言ったらあいつと、そして彼に惚れ込んでいる女友達しかいないのだ。他は誰も（先生ですら）「リーア」と呼んでくれないのだから、不満も溜まるというものである。堅苦しい王宮の生活で慣れたつもりになっていたが、やはり気持ちの良い事ではない。知らぬところで変な呼び方をしていると知れば尚更だ。

しかしそんな理不尽な八つ当たりをするつもりで起こしたわけでもないの、私はそれ以上からかうのを止めて、本題の記事を彼に渡す。

「これを読んでほしい。君の領地に関係のあることだ」

オリの顔から狼狽の色が消えて、真剣なものになる。

さすがは貴族の長男である。この歳で既に自覚しつつあるらしい己の立場と責任に、私は密かに賞賛の笑みを浮かべる。

もつとも、記事を読んだオリの反応は予想外だったが。

きつと自分のように混乱するか、もしくは悪い冗談だと失笑するかと思っていたリーアの瞳に映ったのは、読み進めるほどに青ざめ、絶句し、滝の如き汗を流しながら固まる学友の姿だった。

「あ——リーア、おはよう……」

「おはようございますリーア様」

不意に示し合わせたように三つのドアが開く音がして、階段の上にある廊下から、アリスとサクラが眠たそうな顔を覗かせて下りてくる。

「やあ、おはようアリス、サクラ。リーアは早いね。もう起きてるなんて」

そして目の前には、同じように階段を下りながら呑気に挨拶をしてくるヒースがいた。

呑気な、と形容したのは、挨拶代わりに放ってやった殺気に、怯むどころかまるで反応した様子がないからである。それが文字通り、殺気にも気付かないほど鈍感なのではないと判っているのが余計に腹立たしい。

「……あいにく、休みだからと言って二度寝するほど不健康な生活は送ってなかったからな」

だから、挨拶の代わりに、最大限冷ややかな言葉を返してやる。もつとも、この程度でどうにかなる相手だったら、最初から苦労しないのだが。

「へえ、健康的だね」

案の定、ヒースの方は気にした素振りすらなかった。むしろその声はどこか楽しげですらあり、私は悔しさに内心歯噛みする。

「あの、リーア様。オリオンさんは一体……？」

間にアリスを挟んで席に着いたサクラが、訝しげな顔で訊ねてくる。オリはまだ石像状態から復帰してなかった。

「いや、な……気になった記事を見つけて、読んでもらったら、こうなった」

「記事？」

と、これは首を傾げるアリス。

ヒースも気になったらしく、友人が凝視している文面を後ろから覗き込む。

「ああ……」

ざっと文面に目を走らせた彼は、納得したような呟きを漏らす。

私はその反応に不自然さを覚えた。そこには関心はあっても、驚きや戸惑いはない。まるで起こるべくして起こった物を確認したような、そんな顔だった。

「おい、貴様——」

「——ヒースっ——！」

眉をひそめながら訊ねかけた私の声を遮って、突然復活したオリがヒースに向かって詰め寄る。あまりの剣幕に、見ている私でさえ思わず肩が竦みそうになったが、肝心の当人に効果はなかった。

「どうしたのオリ？　まるで死んだ貝になったときのような顔だけだ」

「意味不明すぎるわっ！　どんな顔だよ！？　単に寝不足なだけでいつも通りだって！　いやそれより——」

「さて、今日の朝食はどんなのかな」

「待て待て待て！？　さっきので『話は終わった』みたいな顔すんな！　まだ本題にすらはいつてねえんだから！」

「（ち……っ）——そうだったの？　気付かなかった」

「今明らかに舌打ちしたよなあ！？　切り上げる気満々だったろお前！」

私もそう感じた。が、残念ながら加勢することはできなかった。主に、無言でプレッシャーをかけてくる銀色の友人が原因で。

「これ見ろこれ！」

焦れったさに我慢できなくなったらしく、オリは例の新聞をヒースの鼻先に突き出す。

「なになに——？　『必見！　大貴族の令嬢から愛しの相手を奪う

方法大公開』？」

「——うえ間違えた！？ 違うこつちだこつち！」

肝心の記事が載ってる方を自分に向けていたオリは、慌てて新聞をひっくり返す。

「……アリス。冗談だと思うが、魔導書をしまえ」

「……わたしはいつでも本気」

「頼む。彼もわざとじゃないはずだ。悔い改める機会を与えてやってくれ」

人体を一瞬で凍結させる禁忌の術式を読み解こうとするアリスを、私は冷静な口調を装いながら必死に宥め説得する。実際に一年生が唱えたところで成功するとは思えないが、それでも止めずにはいられなかった。

彼女の瞳に宿る殺気は、ほとんど殺し屋のそれと区別が付かなかった。

「……わかった」

しばらく剣呑な眼でこちらを見つめていたアリスは、やがて渋々といった様子で引き下がる。私は内心で深々と安堵のため息をつく。

一方、記事を一瞥したヒースは全く質の異なるため息を漏らした。

「……オリ、こんなガセネタじみた三流記事を信じるのは愚者の極みだよ？」

「ああ。オレだって普通なら信じねえさ。普通なら。けど、これを読んで分らないとは言わせねえぞ」

「さあ？ ユリのストレスがとうとう爆発して、たまたま通りがかった盗賊団が八つ当たりで全滅したなんて、僕にはさっぱり推測すらつかないよ」

「すつげえ的確に言い当ててるじゃねえか！」

「ちなみに村にあった金品の一部は母上が傭兵代の名目で戴いていつてるかもね」

「かもねどころか間違いなく奪ってるだろこれ！？ しかも盗賊団がかき集めた財宝まで！」

「良かったじゃないかオリ。ちょうど村一つ分の被害で済んで」

「何がちょうどなんだよ！　ていうかオレがいつ被害総額の計算なんかした！？」

「うん？　僕はしたけど」

「だったらあらかじめ教えてくれよ！　自力でこうなることに気づけなかったオレも悪いけどさ！」

オリは涙目だった。子供同士のケンカにしては尋常じゃない展開であるが、どうにも話が見えてこない。

どうもユリという名前の人物が、死玉の盗賊団をこらしめたように聞こえるのだが——そう言えば、前にアリスがその名を口にしていた気がする。

私は、そつとアリスに訊ねる。

「——アリス、ユリというのは一体誰なんだ……？」

「ヒースの妹」

アリスの答えは簡潔だった。が、その声はいつもより若干硬いように感じられた。

そしてどうやら、それは間違いではなかったらしい。不審に思っ
て気付かれないように顔を覗き込んでみると、アリスはいつもの表情に乏しい瞳に、先ほど以上の冷やかな感情を宿していた。

「いつもわたしとヒースの仲を邪魔しようと画策してる小姑。わたしが簡単に会いに行けないように、南の森に使い魔やトラップを張り巡らしたりやりたい放題してた。いつもヒースにベタベタしてて、ご飯はもちろんベッドのときも湯浴みのときも一緒だって顔を合わせる度にじまつ、じま、自慢話を……っ！」

言ってる内に怒りが込み上げてきたのか、アリスは途中から激しく唇をわななかせる。

「はわっ、あ、アリスさん落ち着いて！　魔力が漏れて、何だか黒い煙になっちゃってますよ！？」

サクラが必死にアリスをなだめすかす。杖どころか魔導書さえ手にしてないというのに、魔力が物理現象に変換されていた。

そもそも杖などの魔法発射媒体は、魔力を外へ流しやすくするための物であるから、例え持ってなくてもこのような現象を起こすことは可能である。が、普通はこうはならない。

よほど潜在的な魔力が大きいのだろう。あと今までの鬱憤も。

「——ん？ 待て。妹だと？」

「……そうだけど、それがどうかしたの？」

「どうかした、ではない！ 有り得ないだろう！？」

危うくそのまま聞き流してしまうところだったが、考えてみれば異常極まりない事実である。

ヒースの家族構成については、大まかに把握しているつもりだ。魔法使いの父親は出稼ぎに行っており、母と妹が家の留守をしていると、以前ちらりと耳にした。

ヒースの妹ということは、どれだけ多く見積もったとしても年齢はせいぜい十一歳程度。

そんな歳で、あの死玉の盗賊団を叩き潰した？ 大人の魔法使いもいたのに？

（いやいやいや。そんな馬鹿な——）

私は心の中で何度も頭を振り、一番有り得そうな事実を確認するため、アリスに訊ねてみる。

「……………アリス。アステイン領には優秀な魔法使いがいるのだろう？。」

「そんなのがいたら、何かトラブルが起きる度に、わたしの家から騎士団が派遣されたりなんかしない。今あそこにいる魔法使いは、ユリちゃん一人だけ」

もったもな理屈だった。

「——一体どうなってるんだ、あいつの家系は…………」

昼頃である。

寮を出て大広間で昼食を食べ、しつこく近寄ってくる同級生や上級生を何とかまいた末に湖の畔でようやく一人になれた私は、今に

も頭痛が起きそうな頭を押さえて小さく呻く。

——そもそも、あの男が私より上にいる時点で色々とおかしいのだ。

基本的に、魔法使いの才能は家系——もつと言えば血筋に大きく左右される。

魔力容量、魔法抵抗、魔力適合。これら魔法力の三要素は生まれたときから決まっており、最適化することはできても、伸びることはない。アーカーシャの血をどれほど色濃く受け継いでいるかによって、魔法使いの力量は決まる。

アーカーシャの直系とされる三大国の頂点は、その血が特に濃い。すなわち、テロスと聖教、そしてアルケー。

ピラミッドに例えるなら、ハスナー家は間違いなく最下層に位置している。実力主義の我が国では、階級が実力と反比例することはまず有り得ないのだから。アルケーの直系である自分が本気で競えば、負けることなどあるはずがない。

なのに、負けている。それも実技で。

座学ならまだ分かる。知識という、人の叡智の積み重ねは、魔法力の三要素とは関係ない。

だが実技となると、これらの要素が大きく関わってくることになる。

普通なら、勝てて当たり前前の勝負。努力で補うことのできない大きな壁——とまでは言わないが（なにせまだ一年だ）、容易に越えられるものではないほどの実力差。こちらも努力を怠っていない以上、勝てる道理はあっても、負ける道理はないはずなのだ。

だというのに、現実に向こうの全戦全勝。

私があらん限りの意志と力で自己ベストを叩き出しているというのに、あいつは鼻歌交じりでそれらをあっさりと塗り替えていくのだ。しかも、圧倒的なスコアで。

「はあ……」

知らず、ため息がこぼれる。

情けない話だ。最下級の魔法使いに手も足も出ないとは。しかも実力で勝てていないにも関わらず、学年代表の座を奪ってしまった。もう少し性格が悪ければ「ざまあみろ」とでも言っていたのだろうが、生憎と心の中を占めるのは今も後悔だけである。

「せめて、実力でもぎ取ったものであったなら、まだ楽なのだがな……」

先生達の心情は理解できなくもないが、やはり納得できるものではない。それでも最後に押し切られてしまったあたり、所詮は小娘ということか。

このままでは延々と自嘲を重ねてしまいそうだったので、私は立ち上がると宮殿の方へ足を向ける。図書館に行つて勉強でもすれば、気も紛れるだろう。

「リーア様っ！」

ところが数歩も歩かない内に呼び止められるはめになり、私はやや気落ちしながらそちらを振り返る。

赤の塔から、シンエン・リー先生がこちらに向かつて走ってくるのが見えた。

「ど、どうしたのですかシンエン先生!？」

私は目を丸くして、かつての師に訊ねる。シンエン先生は私の前まで来ると、肩で大きく息をしながら呼吸を整え、言う。

「じ、実は先ほど、リジー先生から教えられたのですが……落ち着いて聞いてください。貴女様に対し、トリニティが申し込まれました」

「な——!? ど、どういうことですか? 確かトリニティは、四年前から誰もが挑戦を避けているはず……」

「ええ、ですから四年ぶりの挑戦者です。しかも、貴女様と同じAクラスの男子です」

それを聴いた瞬間、私の脳裏にあの男の姿が浮かぶ。

——なるほど、これで決着をつけようというわけか……

どうりで学年代表が決まっても大人しかったわけだ。

頭が冷え、口元に自然と笑みが広がる。さっきまでの鬱屈した気分が嘘のようだ。

「——分かりました。それで、相手の名前は？」

質問ではなく、確認のための問い。シンエン先生が答える。

「はい。その者の名は、オリオン・クロム・アステインといいます」

「——は？」

その名前が指す人物を思い浮かべるのに、私はたつぷり十秒の間を要した。

3・2「嵐の前触れ」（後書き）

予定通りに掲載できて一安心です。ただ申し訳ないのですが、次回は少し遅くなってしまうかもしれません。ご迷惑をおかけします。がよろしく願います。

3・3「緑色のトラブル」

白の塔の三階には、普段誰も使わない空き部屋が二十近くある。元はクラブ活動未満の同好会が臨時部屋として借り受けていたらしいのだが、三年前の同好会制度撤廃に伴い、単なる空き部屋だけのフロアと化した。現在では一部の生徒が内緒話に利用するくらいである。

「——どういうことか説明してもらおうか」

その内の一室に、冬のような極寒の音が響く。

声の主はリーアだった。

時間はちょうど夕暮れ時。

話し合いという名の尋問でお姫様から呼び出された僕は、オリと一緒にこの椅子とテーブルしかない部屋に拉致監禁されていた。

どうにも理解しがたいのだが、オリがトリニティを申し込んだと知ったリーアは、僕らと会談の場を設ける必要があると思ったらしい。わざわざこの部屋を選んだのは、談話室では騒がしくてまともに話ができないと考えたからか。

まあそれはともかく。

「どうしてそれを僕に訊ねるか聞きたいんだけど」

「とぼけても無駄だ。トリニティを申し込んだのはオリだが、実質ゲームに参加するのはお前だと聞いたぞ」

「……先生達もお喋りだね」

僕は小さくため息をついて、わざとらしく肩を竦める。隣でオリが、疑われなかったことを感謝してか、深い安堵の息をついていた。トリニティは、実際のゲームに参加する者と、それをサポートする者のタッグで行なわれる。

最終的に学年代表に選ばれるのはゲームに参加する方だ。この場合、ゲームに参加するのは僕で、申し込んだオリはサポートに回ることになっている。

リーアはどこか不機嫌さを顔に滲ませて言う。

「ヒース・ハスナー。何故この時期に、オリを巻き込んでまでトリニティを申し込んだ？ 何を企んでいる？」

「企んでいるだなんて人聞きが悪いな。僕はただ、策略や謀略を張り巡らして、どう君に力関係を再確認させて足下に跪かせるかを考えているだけなのに」

「何が『人聞きが悪い』だ！ これ以上ないくらい凶星ではないか！」

バンツとテーブルを叩く音。僕は少し呆れた。

「はあ……リーア。仮にも僕に奴隷のように扱ってくれて頼んだから、もう少しそれらしい態度を心がけないと」

「~~~~っ！」

どれ——お姫様はまるで怒鳴り散らす寸前のような顔になるが、何とか堪えたようだ。

「……………つまり貴様は、私を屈服させるためだけに、トリニティを申し込んだというわけか？」

「もちろん」

「……ここが王宮なら一も二もなく打ち首にしているところだが、それは置いておくとしよう。オリを巻き込んだ理由はなんだ？」

「そんなの、僕に向けられるはずの敵意や悪意、妨害その他諸々の危険を、身代わりとして押しつけるために決まってるじゃないか」

「おい待てなんだそれ！？」

それまで触らぬ神に祟りな——藪蛇を突くのを恐れて事の成り行きを見守っていたオリが突っ込んでくる。

「あれ？ 言ってなかったっけ」

「初耳だ！ どうも話がおかしいと思ったらそういう魂胆かよ！？」
「事後承諾って便利な言葉だよな」

「お前にだけなあ！ そんな危険なことに巻き込まれるんだったらオレは降るぞ！？」

「え……オリ、まさかとは思っけど、裏切る気じゃないよね？ せ

つかく勝ったあかつきには、お姫様に給仕服を着せて奉仕させてあげるって約束したのに」

「……オリオン・クロム・アステイン？」

あ。リーアの瞳に殺意が生まれた。

オリも気付いたようで、慌てて言い訳する。

「いやいやいや誤解ですよりーア様！？ こいつが勝手に言っただけでオレは別に同意してませんから！」

「はあ……あんなに真剣に頷いておいて、不利になった途端に手のひらを返すなんて」

「すつげえ爽やかな顔で脅迫してきたからだろうが！」

失礼な。僕はただ、盗賊団から資金を得た母上をこのまま放置したら、どんな厄災がアステイン領に降りかかるかを示唆しただけだ。

「とにかくオレは降りるぞ！ 実家は気になるけど、考えてみれば母さんだつて黙つてやられるはずがねえ。ただでさえ宿題を片付けるだけでも手一杯なのに、学校中から狙われてたまるか！」

「……そうか。分ったよオリ。無理言つてごめん」

素直に頭を下げると、何故かオリは固まった。

「……」

「……おい。何か裏があると思うのは私だけか？」

呟くリーアの眼は、まるで口を大きく開けたまま「私は無害ですよ」と公言している大蛇を前に、迷わず剣を構える騎士のようであった。

「まさか」

あまりの警戒ぶりに、僕は苦笑してみせる。

僕だつて鬼じゃない。ちゃんと引くべき一線は弁えているつもりだ。親友のオリが本気で嫌がっているのだから、ここは大人しく諦めようと判断しただけである。

なのに、どういうわけか、二人とも疑いの目を向けたまま逸らさない。

仕方ないので、僕はこの話はここまでという意思表示として席を

立つ。その際、懷から一枚の紙をさり気ない動作で取り出す。紙面にはほとんど何も書かれていない。一番下の方に赤い指印と、その隣に黒字で『オリオン・クロム・アステイン』という署名があるだけだ。

「さて。じゃあ僕は用事があるからこれで――」

「待て待て待て待て待て」

立ち上がるうとした僕の肩を、オリが必死の形相で掴む。

「どうしたのオリ？　これから母上に手紙を出しに行かなくちゃいけないんだけど」

「それってアレだよなあ！？　オレが悪鬼の群れに殺されそうになったとき、「これにサインをしたら助けてあげるよ」って無理矢理書かせたやつ！」

「これ送ったら喜ぶだろうね。次期アステイン領当主の直筆サイン。何を書いても構わない白紙状態で、おまけに血の指印付き」

白いところを文字で埋めて、然るべきところに提出すればかなりの無茶が通るだろう。八年待つて署名の人物が成人すればさらに。

僕の言葉に、オリの顔が蒼白になる。

「よ、止せ……それだけは本当に洒落にならない。下手すると死ぬしまう……」

「大丈夫だよオリ。僕の母上は『生かさず殺さず』が特技なんだから。たまに一方に偏っちゃうけど、まあ安心して良いよ」

「それ全然安心できねえからな！？　分かったつ、分かったから！　さっきのは取り消す！　だからそれだけは本当に止めてくれ！」

「『オレは姫さんに給仕服を着せて奴隷のように奉仕させるのが夢だったんだ』って言えば考えてあげるよ」

「いくら何でも足下見過ぎだろてめえ！」

「さて。瞬間転送なら五分か」

「オレは姫さんに給仕服を着せて奴隷のように奉仕させるのが夢だったんだあ――っ……」

「よく言えたねオリ。さすが僕の親友」

オリの魂削るような叫びに、僕は惜しめない拍手を送った。正確には僕だけじゃなく、正面にもう一人。

「……あの、姫さん？ 分かってますよね？ 仕方なかったって――」

「もちろんだとも。オリオン・クロム・アステイン」

「――何か目が全然笑ってないように見えるんですけど、オレの気のせいですか……？」

「……オリ、最初に謝っておく。死んでも恨むな」

多分それは死刑宣告なんじゃないかなと思ったが、そんな思考は、真に魂削る絶叫に押し流されてしまった。

カルネティア魔法学校の定めたトリニティのルールによれば、競技は三つ用意されている。

心身の強さを測る『チエーン・ゴーレム』。

技術の巧みさを競い合う『テクノ・マジック』。

体術において優劣を決する『トラップ・ロワイヤル』。

トリニティの開催期間は三日。競技は一日ごとに行なわれ、先に二種目を勝ち取った者が勝利し、学年代表の地位を得る。

休日が終わって次の日。平日の授業後から行なわれる最初の競技は『チエーン・ゴーレム』である。

ルールは簡単。それぞれ体中にまわりつく鎖付きの手枷足枷を嵌め、別々の競技場に入場。全方位から湧出てくるゴーレムを得意な魔法で破壊していき（素手でも良いらしいが、実行した馬鹿はいない）、最終的に多くのゴーレムを倒した者が勝利する。ただし、選手に嵌められる枷とその鎖には特殊な魔法がかけられており、選手が魔法を発動しようとする、体を締め付けてくる効果がある。この束縛は装着者の精神力によってのみ抵抗が可能で（完全に解くことはできない）、選手は心の力でそれを抑え込みながら、ゴーレムに対処する必要がある。

「誰が作ったかは知らないけど、いい性格してるよね」

「もし生きてたら、きつと貴様と良い友達になっただろうな」

いつものメンバーで競技場へ向かう途中、ルールブックを読み返した僕の感想に、左端を歩くリーアが素っ気ない声で突っかかる。

既に今日の授業は全て終わり、空は朱に染まりかけている。だが皆の関心は出された宿題の山ではなく、これから始まるトリニティにあった。

「何だかお祭り騒ぎみたいですね……」

僕とリーアに挟まれたサクラが、半ば呆然と呟く。

「確かにね。元々あんまり娯楽とかないようなところだし。特に今回は面白い組み合わせだから」

四年ぶりに開催されるというだけではない。奴隷対駄犬——もとい、一国の姫と貧乏貴族の対決である。しかも実力は共に文句なしのAクラス。パートナーも同様となれば、盛り上がらないわけがない。

「……ねえヒース。今からでも遅くないから、わたしをパートナーにして」

後ろから服の裾を引っ張り、アリスが懇願してくる。

ちなみに今回、リーアはサクラと組むことになった。

普通に考えれば、この手の事は平民のサクラよりも、貴族のアリスの方が向いている。選手のサポートが主な仕事とは言え、その重圧は相当なものだ。しかもサクラの性格では、緊張のあまり空振りしてしまう可能性が高いと言える。

当然、お姫様の味方である先生達は反対した。僕としても、ウサギは全力で弄びながら狩りたいのでアリスの方を勧めたのだが、彼女は一言だけ口にしてそれらを押し切った。

曰く、「味方に後ろから刺されたらたまらない」。

そんなわけで、今回アリスは不参加である。

今思い返してももったいない話だ。せっかく、色々と楽しめるように、裏で打ち合わせしていたというのに。

とにかくそういうわけなのだが、アリスは未だに諦めがついてい

ないらしい。

だがさすがにこればかりはどうにもならない。僕は肩を竦めて「無理だよ」と首を振る。

「残念だけど、このゲームは僕に選択権があるわけじゃないからね。オリ次第だよ」

「……オリ。今すぐわたしにその座を明け渡しなさい」

「いやいや無理だって！？ オレ一応このゲームの挑戦者だから、今さら取り下げなんてできねえよ！」

「相変わらず使えないわね……所詮は三流貴族か」

「代わってほしいのはオレも同じだって！ 昨日の見たろ！？ 姫さんのそこには応援メッセーじや花束が贈られてたのに、オレには呪いの手紙とワラ人形だぜ！？」

「本物の呪いでくたばってくれば良かったのに……」

アリスが心底残念そうに呟く。

「アリス……？ 私の聞き間違えか、口調がおかしくなったように感じたんだが——」

「ああ。たまに昔の地が出るんだよ、この子」

「は……？」

リーアの目が点になる。説明するのも面倒だし、それ以上は答えない。

角を曲がり、大広間へと続く廊下に出る。同級生の何人かがこちらに気付き、すれ違い様にリーアへ声援を送り、オリに罵倒を浴びせる。

「あの、オリオンさん？ あんまり気にしない方がいいと思いますよ」

「もう気にする気力もねえ……」

サクラに気遣われたオリは、世界征服を企んだ末に失敗した豚のように低い声で呻き、大きく嘆息する。

「はあ……何でオレだけこんな目に遭ってんだか……」

「まったくだよ。これがメロンだったら、例え猫の姿でも何倍も

良い仕事してくれるのに……」

「じゃあそっちに頼めよ！ オレ必要ないだろ！？」

「いや。あつちは今バイト中で忙しいし」

「一体お前は猫に何させてんだよ！？」

それはもちろん、オリより稼げる仕事に決まっている。

「——にしても、少し気になるな。人気の偏りは仕方ないにしても、やけに君への悪感情を抱く者が多いような……」

「……そう言われてみると、確かに。オレ、そんなにみんなの神経逆なでするようなことした覚えはないですけどね。こっちには散々嫌がらせとかあるのに、実際に出るヒースの方は何の被害も受けてないってのは……」

「きつと日頃の行いが良いんだろうね」

「ぜったい違いから！ そうじゃなくてだな、もしかしたらこれ、誰かが意図的に煽ってるんじゃない——」

オリがそこまで言ったときだった。

大広間の入口を通り過ぎようとしていた僕らの耳を、活発なソプラノの声が過ぎる。

「——さあ注目っ！ もうすぐ始まるトリニティ第一競技『チェー
ン・ゴーレム』！！ 対決するのはAクラスにして学年代表の座に
あるリーア・アルケー様対、超極悪貴族オリオンの憐れな被害者ヒ
ース・ハスナー！ 賭け金は一口十ユドルだからね。リーア様の勝
ちには二倍、オリオンが勝った場合は五十倍だよー！ さあみんな、
どんどん——」

「お前かああーッツ！！」

人集りの奥から届いたその声に、オリが怒りの咆哮を上げる。競技場へと向かっていた足を無理矢理軌道変更し、そのまま烈火の如き勢いで大広間に突撃する。予期せぬ悪役の出現に、周りの生徒達が慌てて道を空け、人集りが真つ二つに割れた。

「おい！ この誰だか知らねえけど好き勝手なことばっか言いやがって！ 顔見せやが——れ……？」

怒鳴り散らしていたオリの声が不自然なところで途切れた。どうなることかと見ていたリーア、アリス、サクラの三人から、微かに息を呑む気配が伝わる。

人垣の奥にいたのは、深みのある鮮やかなエメラルドの髪と瞳が特徴的な女の子だった。

見た目の年齢は僕らと同じくらい。髪の毛は短めで、口の端から長い八重歯が覗いている。身長は平均的だけど、動きやすそうな半袖半ズボンの制服から伸びる手足はすらりと引き締まっており、かなり活発な印象を受ける。あと顔の造形も良い。少なくともそこらに転がっている有象無象のかばちゃよりは段違いに。

だけど三人が反応したのはそれが原因じゃない。何割かは関係してるだろうけど、一番の理由は、この、肌に叩き付けられる気配。オリが割り込んできた瞬間に発せられた、ほとんど物理的に感じ取れる鬼気のせいだろう。

「……いきなりボクに何の用？ オリオン」

「あ……いや、そのだな……」

「なに？」

同年代の女の子から発せられているとは到底思えない凄味に、珍しくオリがたじろぐ。

例えるなら、強大な魔力を秘めた魔獣に相対したときのような感じだろうか。大きな爪と牙を持つ獣が、その野性的な獐犷さをむき出しにして獲物を見据えているような。

本能的にそれを感じ取った生徒達が次々と後退り、逃げるように大広間から出て行く。あつという間に伽藍堂の空間ができあがったが、さすがと言うべきか、後ろの三人は逃げ出すことなく踏み止まっていた。

「……って、あれ？ サクラ？」

「……」

訂正。立ったまま気絶しているのが約一名。

「——ん？」

不意に、ネズミ程度ならショック死してしまいそうな眼光でオリを睨んでいた翠玉の瞳が、ふと気付いたようにこちらを見る。

その途端、大広間を満たしていた気配が跡形もなく吹っ飛んだ。

「わあ！ みんな！ そんなところでどうしたの？」

「ぐげ……っ!？」

真正面で立ち尽くすオリの顔を適当にグーでどかし、少女は打って変わって親しげな態度で僕らの傍まで駆け寄ってくる。

「こんにちはリーア！ もうすぐ本番だけど体の調子はどう？」

「あ、ああ……いや、大丈夫だが……すまない。どこかで会っただろうか——？」

狐に包まれたような顔になりながらもリーアが訊ねると、女の子はきょとんと首を傾げた。

「あれ？ 会ったことあるも何も——って。あ、そっかそっか。ごめんね、ボクとしたことが、すっかり忘れてたよー」

「は——？」

「はじめまして、リーア。ボクはメーリ・レイ・ロン。メーリって呼んでもらえると嬉しいな」

目が点になるリーアに、メーリは朗らかな声でそう自己紹介すると、さっと僕らに背を向ける。

「それじゃ、ボクは行くね。それでも色々と忙しくて。あ、試合楽しみにしてるから、頑張ってねー」

そう言ってこっちにウィンクすると、メーリは賭け金の束が入った鞆を揺らしながら大広間を去っていった。

「……嵐みたいな子」

「……そう、だな。いや、しかしあの感じ——どこかで……」

「いえそれより、オリさんが床の上に転がってるんですが……」

「あ、サクラ。もう目が覚めたんだ？」

いつの間にか意識を取り戻したサクラの視線の先には、まるでゴミのような顔になったオリがいた。

トリニティ第一種目の舞台である第一競技場と第二競技場は、青の塔の中に設置されている。

事前説明によれば、大きさは半径二五メートルの円形。壁は石で隙間無く閉ざされており、天井までは約三〇メートルある。真上には入学式の時に見た物と良く似た銀の球体が浮かんでおり、こっちの映像を別のところに流しているようだ。

「——オリ、調子はどう？」

『まだ鼻の先が痛え……』

耳に取り付けた通信用の魔法具から、くぐもった声が返ってくる。手首足首に取り付けられた鎖付きの枷にわずらわしさを感じつつ、僕は彼の返事のため息をついた。

先ほどのちよつとした騒ぎからもうすぐ三〇分。ゲーム開始まで、あと少し。

「しつかりしなよ。女の子に殴られた程度で、みつともないよ」

『いや、それ言われると、正直きついんだけどさ……でも何だったんだろうな、あいつ。メーリ・レイ・ロンだっけ？ 殴られたときなんか、まるで鬼の金棒でぶつ飛ばされたような感じだったし……同級生にあんなのいたか？』

「さあね。それよりオリ、もうすぐ始まるよ」

壁に埋め込まれた巨大砂時計にある砂が、段々とゼロへ近づいていく。きつと今頃、隣の第二競技場では、リニアが適度に体を緊張させ——いや、サクラの緊張を適度に解きほぐしながら、同じように開始の合図を待っていることだろう。

このゲームでは基本的に、外の情報はサポーターを介してしか手に入れる事ができない。

相手の得点や戦術、観客の様子など——それらを伝えるかどうかは、向こう次第。やる気を煽るために相手の得点を教えたり、ペースを崩させないよう嘘の情報を与えたりと、こちらよりも高度な駆け引きを要求される。いや、選手もそれを解っている分、余計に厄介だ。どれだけ相手を信頼できるかによって、結果は大きく変わる

だろう。

「——よし。徹頭徹尾信じないことにしよう」

『何か言ったか？』

「ううん。別に何も」

最後の砂が落ちる。次の瞬間、目の前に紫の光球が現れ、地面の土を吸収してゴーレムへと姿を変えた。

全体の大きさは椅子に使える丸太くらいだろうか。頭がやたらと大きい。手足は短く、胴体は上の半分ほどもない。説明では、せいぜい犬程度の強さだと言っていたが、なるほど、この形なら納得だ。僕は指輪から十字の杖を取り出し、ゴーレムへ向ける。

「ニード——っ」

魔法を唱えようとした瞬間、体に取り付けた手枷足枷が重くなり、鎖が全身を縛ろうとうごめく。

動きを鈍らせた僕の隙を突くように、ゴーレムが小さな腕をぶんぶん回して襲ってくる。

僕はそれを左の片眼鏡越しに視ながら、いつもより意志を集中させ、呪文を唱える。

「ニードルッ！」

巻き付こうとした鎖が弾かれ、同時に放たれた拳大の針がゴーレムの胴体を貫く。土の人形はバラバラになって地面に落ちた。

『気をつけるヒース！ まだまだ来るぞっ』

今度は一度に五つの光球が現れゴーレムの姿を形作る。どうやらここからが本番らしい。

とりあえず向こうの動きは解った。枷と鎖の特性も。このまま敵が増え続けるとするなら、小規模な魔法で一体ずつ潰していくよりは、まとめて高威力の魔法で吹き飛ばした方が得策だろう。

こちらへ向かってくるゴーレムの攻撃を受け流して、他のゴーレムにぶつかるよう誘導しよう。僕は杖を横に構える。

（——ん……？）

と、そこで、奇妙な違和感を覚えた。

ゴーレムの動きがほんのわずか、変わった気がしたのだ。

飛び上がるゴーレム。振り下ろされる土塊の拳に嫌な予感を感じ、僕は咄嗟に横へ飛ぶ。

次の瞬間、轟音が地面を揺らし、土煙が舞い上がった。

3・3「緑色のトラブル」(後書き)

大変長らくお待たせしました。魔法使いヒースの続きです。

更新遅くなつて申し訳ありません。次はもっと早く投稿できるよう頑張りますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9371u/>

魔法使いヒース

2011年9月19日03時30分発行